

平成30年度

研究活動報告



桜美林大学 老年学総合研究所

はじめに

皆様におかれましては時下益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

老年学総合研究所は、超高齢社会を迎えた我が国において、より明確に「老年学」という、高齢者を取り巻く広範な課題に適切に対処できる研究機関であるとともに、広く社会一般の方々に「老年学」の重要性とさまざまな課題について、総合的な情報発信の中核的機関として、知っていただくことを目標に掲げております。現在、研究所の陣容としては研究員6名（本学の老年学研究科教授をかねております）、客員研究員2名、そして連携研究員31名を擁するわが国を代表する老年学の総合的研究所といえる研究所となっております。本研究所は、研究活動は勿論のこと、修士課程、博士課程に在籍する本学の大学院生に対して老年学のさまざまな課題に関しての実習の場としても利用されております。本年も研究所所属の研究員を中心として活動報告を取りまとめ、ここに平成30年度報告書として皆様にお届けすることができました。

老年学総合研究所は学際的で多様な視点からの老年学研究を総合的かつ強力に推進することはもちろんのこと、国内外の研究機関と連携し、科学的根拠に基づく情報発信を実施し、我が国の健康長寿の実現に向けた取り組みとして実践していく研究拠点でもあります。本報告書におきましても、老年学という広範な領域を包含する学際的研究にふさわしく、各研究員の様々な研究課題とそれらの実践活動を中心として実社会にお役に立つ実証研究が数多く報告されております。

本報告書の作成にあたっては、老年学総合研究所の運営及び研究機関としての活動に多大なご協力をいただいた多くの先生方、また客員・連携研究員の方々、そして研究所の事務局のご努力のたまものであり、ここに厚くお礼を申し上げます。

今後も桜美林大学 老年学総合研究所に対する温かいご理解とご支援、そして厳しいご指導を賜りますようお願い申し上げます。

2019年3月

桜美林大学 老年学総合研究所

所 長 鈴 木 隆 雄

平成30年度 研究活動報告

研究員（常勤）研究活動報告

1)	鈴木 隆雄	1
2)	長田 久雄	5
3)	杉澤 秀博	7
4)	新野 直明	11
5)	芳賀 博	13
6)	渡辺修一郎	16

客員研究員研究活動報告

1)	井上 智代	20
2)	鄭 丞媛	22

連携研究員研究活動報告

1)	青木 宏心	26
2)	有田 昌代	29
3)	安齋紗保理	31
4)	池田 晋平	32
5)	植田 拓也	33
6)	植田 大雅	36
7)	江川 賢一	37

8)	遠田 恵子	38
9)	押切 康子	40
10)	葛 輝子	41
11)	城戸亜希子	42
12)	久喜美知子	44
13)	久米喜代美	46
14)	小林由美子	48
15)	島影真奈美	50
16)	鈴木 知明	52
17)	関野 明子	53
18)	武田 万樹	54
19)	東方 和子	56
20)	徳田 直子	57
21)	中辻 萬治	58
22)	橋本由美子	60
23)	早崎 広司	61
24)	平林 規好	62
25)	藤井 顕	63
26)	堀内 裕子	64
27)	堀口 久枝	68
28)	牧野公美子	69
29)	御園 一成	71
30)	山岡 郁子	72
31)	吉田 綾子	73

1. 研究課題

日本の高齢者の健康水準の経年的変化について

2. 研究活動の概要

この研究では国内の老化に関する長期縦断研究から、高齢者の生活機能の指標として身長、体重、BMI、通常歩行速度、握力、および手段的ADLの6項目に関して1992年から2017年の25年間の変化を分析した。その結果、平均寿命の延伸とともに健康水準の改善が明らかとなっており、新たな世代の高齢者の健康水準に関してはいわば「若返り」現象が出現していることが示された。

3. 研究結果

1) 目的

高齢期の心身の機能の変化を把握するための老化研究には広く知られるように、横断研究、縦断研究、そして定点観測的（時間差）研究が必要である。横断的研究にはコホート差というバイアスが存在し、真の老化をゆがめる。縦断的研究は優れた方法であるが、長期間にわたる研究では時代差というバイアスが含まれる。従って、コホート差や時代差がどのように老化に影響しているかを補正するためには、定点観察的な時代差研究も不可欠となる（Suzuki T, GGI ; 2018）。筆者は先に東京都老人総合研究所（Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology）が実施した老化に関する長期縦断研究（TMIG-LISA）のデータから、1992年から2002年の10年間での地域在宅高齢者における身体機能の変化について、平均寿命の伸びとともに、握力、歩行速度、BMI、血清アルブミン値などがいずれも著しく改善（良い方への変化）を示し、いわば若返り（“rejuvenation”）現象が起きていることを報告した（文献；鈴木&権, 2006年, Suzuki, GGI, 2018）。今回の研究では、我が国の地域在宅高齢者における身体機能や日常生活動作能力（ADL）の変化について、我が国を代表する13の老化に関する長期縦断コホート研究により得られたデータを収集・分析し、2007年～2017年の10年間における変化を明らかにするとともに、TMIG-LISAのデータを加味し、1990年以降25年間におよぶ日本人高齢者の健康水準の変化について考察した。

2) 研究方法

本研究では、13の老化に関する長期縦断研究から共通に得られた測定データのなかから、2007年と2017年の2時点における6項目（身長、体重、体格指数、通常歩行速度、握力、手段的生活活動能力）について対象者（被験者）数、性別、年齢階級（5歳階級）別の平均値±標準偏差、最大値、最小値を収集した。これらの6項目は、高齢者の健康に関する研究では最も通常的に測定される基本的・本質的な測定項目である。本研究で用いられるこれらのデータは個人別のデータではなく、各コホート全体の平均値±標準偏差を収集したものであり、したがって、本研究に関しては倫理委員会の審査は該当しない。

3) 結果

参加コホートの中で、2007±2年において、6項目の全てあるいは一部の項目を収集しているのは5のコホートであり、対象者数の合計は5,144名（男性1,909名、女性3,235名）である。5コホートの対象者の平均年齢は73.2±6.2歳から78.5±4.2歳に分布し、最少年齢65歳、最高年齢97歳であった。一方、2017±2年の6項目データは10コホートから収集され、対象者合計は8,052名（男性3,052名、女性5,000名）であり、平均年齢の分布は71.8±4.5から80.0±4.0歳であり、最少年齢65歳、最高年齢100歳であった。

6項目における2007±2年から2017±2年の10年間の経年的変化について、身長に関しては男女とも各年齢階級において全て増加していた。体重については男性は各年齢階級全てにおいて増加していたが、女性においては前期高齢期では低下、後期高齢期では増加していた。BMIにおいて、男性は全ての年齢階級で増加、女性は85歳－89歳でのみ増加し、他の年齢階級では全て有意に低下していた。通常歩行速度は男女ともに全ての年齢階級で増加が認められ、特に女性の後期高齢期における増加が大きいことが示されている。握力に関しても、男女ともに65－69歳を除いて全ての年齢階級で増加が認められている。また手段的ADLについても、男性では85-89歳および女性では75－79歳を除き、男女ともに得点（スコア）の増加が認められた。

4) 考察

先進諸国を中心この数十年間で平均寿命は延伸し、多くの国々では高齢社会となり、高齢者の健康水準あるいは生活機能にも大きな変化が生じている。日本においては、第2次世界大戦後の1946年には男性50.06歳、女性53.96歳と非常に低い平均寿命であったが、その後今日に到るまで、一貫して上昇を続け2018年には男性81.15歳、女性87.50歳となるに到った。本研究で取り上げた2007年から2017年にかけての10年間に於いても男性5.0歳、女性5.1歳の平均寿命の延伸が認められている。このような著しい平均寿命の延伸のもと、日本の高齢者の健康水準の変化はどのようなものであったか。本研究は我が国の13の老化に関する長期縦断コホート研究からの標準化された測定項目（データ）の分析的研究であり、比較的精度の高いことが特徴である。2007年から2017年の基本6項目の変動を見ると、身長、体重、BMIに関して、男性では身長、体重、BMIのいずれも2007年に比較して2017年ではいずれの年齢階級においても統計学的に有意に増加していることが認められた。一方、女性においては身長は2017年でいずれの年齢階級でも高くなっていたが、体重は前期高齢者では2017年で低くなってお

り、BMIについては85～89歳を除くすべての年齢階級が2017年の方が有意に減少しており、やせの傾向となっていることが明らかになっている。

最近10年間の握力の変化では、男女とも65～69歳群では有意な変化は認められない。また、男性70～74歳群のみはこの10年間での平均値が0.5kgと有意な低下を示していた。しかし、それ以外の年齢階級群では2017年の平均値がいずれも有意に高くなっており、少なくとも後期高齢者においては男性女性ともに顕著な握力の増加と言えよう。

高齢者が自立した生活を送るうえで、移動能力なかでも歩行速度は最も重要かつ必要不可欠な能力であり、高齢者の基礎的運動能力は歩行速度で代表されることが明らかにされている。高齢者の歩行速度は日常生活全体の機能、転倒リスク、抑うつ状態、さらにはADLの低下や施設入所、さらには死亡の予測因子となることが知られている。本研究において、日本の地域在宅高齢者の2007年～2017年にかけての歩行速度の変化は、男女ともそして各年齢階級ともに著しい改善を示している。それぞれの変化率（ $[2017年歩行速度 - 2007年歩行速度] / 2007年歩行速度$ ）は男性では3.7～7.9%、女性では7.5～16.3%と増加しており、最大の増加率は男女とも80～84歳に存在していた。特に、女性では後期高齢期ではいずれも増加率は10%を越えており、歩行速度の改善の度合いが著しいことが明らかとなった。このような日本の地域在宅高齢者の（最も重要な生活機能の基盤的要因としての）歩行速度の変化・改善は1990年代以降連続して生じている現象と思われる。

手段的ADL（I-ADL）に関しても、男性85～89歳および女性75～79歳を除く男女の全年齢階級で2007年に比し2017年において高い平均得点が得られている。特に前期高齢者においては、2017年で男女ともに5点満点中4.89（98%）以上となっており、TMIG-IC（Index of Competence）のsubscaleでのI-ADLの得点はほぼ飽和状態となっている。また男女別では2017年において女性は85～89歳を除いて、全ての年齢階級で4.95（99%）以上と男性を上回っており、女性における日常生活動作能力（ADL）の高いことが明らかとなった。

本研究では、いくつかの限界は存在するものの、超高齢社会を迎え、平均寿命が世界のトップクラスとなっている日本の高齢者における長期間の健康水準の変動を分析し、紹介することの重要性は決して低くない。特に通常歩行速度に代表される高齢者の生活機能の25年以上にわたる著しい改善が認められたことは、いわば高齢者の「若返り“Rejuvenation”」現象とも考えられ、平均寿命の延伸と長寿化は過去に認められたようなfrailな高齢者が増加するのではなく、活力のある健康で自立した高齢者の増加することを意味していることが示唆され、高齢社会における高齢者の社会的資源としての重要性を改めて考えることが必要と思われる。

（本研究は国立長寿医療研究センター研究開発費支援に基づく研究であり、関係各位に深謝する次第である。）

4. 研究業績

- 1) Suzuki T : (Review article) Health status of elderly living in the community in Japan : Recent changes and significance in the super-aged society. [Review] *Geriatrics & Gerontology International*, 18 : 667-677, 2018.
- 2) Suzuki T, Jeong S, Arai Y, Inoue Y, et al. Comparative Study on Change in Degree of Independent Living between Continuation and Discontinuation of Home Medical Care among the Elderly in Japan. *J Geriatr Med Gerontol* 4 : 037. doi. org/10. 23937, 2018.
- 3) Hotta R, Makizako H, Doi T, Tsutsumimoto K, Nakakubo S, Makino K, Suzuki T, Shimada H. Healthy Behaviors and Incidence of Disability in Community-Dwelling Elderly. *American Journal of Health Behavior*, 42(1) : 51-58, 2018.
- 4) Doi T, Makizako H, Tsutsumimoto K, Hotta R, Nakakubo S, Makino K, Suzuki T, Shimada H. Association between Insulin-like Growth Factor-1 and Frailty among Older Adults. *The Journal of Nutrition, Health & Aging*, 22(1) : 68-72, 2018.
- 5) Doi T, Makizako H, Tsutsumimoto K, Hotta R, Nakakubo S, Makino K, Suzuki T, Shimada H. Combined effects of mild cognitive impairment and slow gait on risk of dementia. *Exp Gerontol*, 110 : 146-150, 2018 Jun.
- 6) Saito T, Murata C, Jeong S, Inoue Y, Suzuki T. Prevention of accidental deaths among people with dementia missing in the community in Japan. *Geriatrics & Gerontology International*, 18 : 1301-1302, 2018.
- 7) Shimada H, Makizako H, Doi T, Park H, Tsutsumimoto K, Verghese J, Suzuki T. Effects of Combined Physical and Cognitive Exercises on Cognition and Mobility in Patients With Mild Cognitive Impairment : A Randomized Clinical Trial. *J Am Med Dir Assoc*, 19(7) : 584-591, 2018.
- 8) Watanabe Y, Arai H, Hirano H, Morishita S, Ohara Y, Edahiro A, Murakami M, Shimada H, Kikutani T, Suzuki T. Oral function as an indexing parameter for mild cognitive impairment in older adults. *Geriatr Gerontol Int*. 18(5) : 790-798. 2018.
- 9) Tsutsumimoto K, Doi T, Makizako H, Hotta R, Nakakubo S, Makino K, Suzuki T, Shimada H. Aging-related anorexia and its association with disability and frailty. *Journal of Cachexia, Sarcopenia and Muscle*, 9(5) : 834-843, 2018.
- 10) Nakakubo S, Makizako H, Doi T, Tsutsumimoto K, Hotta R, Lee S, Lee S, Bae S, Makino K, Suzuki T, Shimada H. Long and Short Sleep Duration and Physical Frailty in Community-Dwelling Older Adults. *J Nutr Health Aging*, 22(9) : 1066-1071, 2018.
- 11) Nakakubo S, Doi T, Makizako H, Tsutsumimoto K, Hotta R, Kurita S, Kim M, Suzuki T, Shimada H. Association of walk ratio during normal gait speed and fall in community-dwelling elderly people. *Gait and Posture*, 66 : 151-154, 2018 Oct.
- 12) Tsutsumimoto K, Doi T, Makizako H, Hotta R, Nakakubo S, Makino K, Suzuki T, Shimada H. Cognitive Frailty is Associated with Fall-Related Fracture among Older People. *J Nutr Health Aging*, 22(10) : 1216-1220, 2018.

1. 研究課題

高齢者の心理的適応に関する研究

2. 研究活動の概要

心理機能の加齢変化に関して、加齢性難聴を取り上げ、簡便な自己評価の方法の検証、入院患者と看護師とのコミュニケーションに関連する要因の検討、認知症カフェと家族支援に関する検討、高齢者の施設環境と生活の質との関連に関する研究を、在学者・修了者と共同で行った。

3. 研究業績

【著書】

- 1) 長田久雄・佐野智子・森田恵子・松田修編著、高齢者の感覚の特徴、最新老年心理学、ワールドプランニング；東京、2018.7.10

【論文】

- 1) 上野佳代・菊池和美・長田久雄 国内文献にみる高齢者の居場所に関する研究－エイジング・イン・プレイスにむけて－、2018.3.20 老年学雑誌第8号 33-50
- 2) 辛島順子・長田久雄 地域在住高齢者の主観的健康感と低栄養を予防する食生活に関する検討 2018.3.15 ヒューマン・ケア研究 第18巻第2号 111-116
- 3) 小林由美子・杉澤秀博・刈谷亮太・長田久雄 地域在住高齢者における健康関連の逆境に対するレジリエンスの構成概念 老年社会科学 第40巻第1号、32-41. 2018.4.20
- 4) 佐野智子・森田恵子・奥山陽子・伊藤直子・長田久雄、加齢性難聴の早期発見に向けた指こすり・指タップ音聴取検査の妥当性の検討、日本公衆衛生雑誌、第65巻第6号、288-299

【学会発表】

- 1) R. Zota, R. Takahashi, K. Yamamoto, T. Yoza, S. Saima, H. Osada, Comparison of physical conditions and lifestyles between adults and the elderly in suburbs of Laos, 2017.9.1, (8.29-9.9)、the 31st annual conference of the European Health Psychology Society, Padova, Italy.
- 2) 萩原真由美・長田久雄・柴田博、「デスカフェ」－我が国の現状－、2017.10.22、第12回日本応用老年学会大会、桜美林大学四谷キャンパス。
- 3) 上野佳代・菊池和美・澤岡詩野・長田久雄・中村桃美、エイジングインプレイス実現のためのインフォーマルな場所の意味：まちの暮らしの保健室における保健医療福祉専門職へのインタビュー調査から、2017.10.22、第12回日本応用老年学会大会、桜美林大学四谷キャンパス。
- 4) 鈴木章一・松永博子・中村桃美・西山裕也・渡邊修也・遠座俊明・崎山みゆき・渡辺修一郎・藤原佳典・長田久雄、その1高齢者用職業能力判定項目作成の試み：米国のO*netを参考に、2017.10.22、第12回日本応用老年学会大会、桜美林大学四谷キャンパス。
- 5) 松永博子・鈴木章一・中村桃美・西山裕也・渡邊修也・遠座俊明・崎山みゆき・渡辺修一郎・長田久雄・河合恒・大淵修一・藤原佳典、その2健康調査から見た高齢者の就労状況と職業能力判定項目（高齢者用）および身体・認知機能との関連、2017.10.22、第12回日本応用老年学会大会、桜美林大学四谷キャンパス。
- 6) 佐野智子・森田恵子・長田久雄、指こすり・指タップ音聴取検査の検討－高齢者による難聴のセルフチェックの可能性－、2017.11.1（会期：10月31日、11月1日、2日）、公衆衛生学会、鹿児島。
- 7) S. Brennan, H. Osada, Dementia Care: Long-Term Care Facilities' Environmental Design and Quality-of-Life of Older Adults, 2018.7.22 (2018.7.19-23)、29th International Nursing Research Congress, Melbourne, Aistralia

【科研費などの助成金】

- 1) 基盤研究 (A) 研究代表者 東京都健康長寿医療センター 藤原佳典 分担者 長田久雄 研究課題名 大都市求職高齢者の実態解明およびシームレスな社会参加に向けた研究
- 2) 基盤研究 (C) 研究代表者 日本医療科学大学 森田恵子 分担者 長田久雄 研究課題名 高齢患者の簡易的聴覚機能評価の開発と効果的な言語的コミュニケーション方法の解明
- 3) 基盤研究 (C) 研究代表者 北星学園大学 田辺毅彦 分担者 長田久雄 研究課題名 特別養護老人ホームにおける持続可能な介護システムの研究
- 4) 基盤研究 (C) 研究代表者 京都ノートルダム女子大学 加藤佐千子 分担者 長田久雄 後期高齢者の「低栄養」を予防するための「食と心理的支援」の研究

1. 研究課題

- (1) 高齢者における健康格差とその要因に関する研究
- (2) 要介護透析患者における健康格差とその要因に関する研究
- (3) 高齢者の介護サービスの利用・利用意識に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者の健康格差とその要因に関する研究

本研究は、高齢者の健康・健康維持習慣の社会階層による格差のメカニズム解明に関する研究の一環として行っている。研究の目的は、社会階層と健康維持習慣を結びつける心理的媒介要因を明らかにすることにある。着目した心理的媒介要因は時間的展望である。時間的展望は、Zimbardoらが提案しているモデルによれば、「過去否定志向」「過去肯定志向」「現在運命志向」「現在快楽志向」「未来志向」の5次元に区分される。これらの次元のいくつかは健康維持習慣に有意な効果があるとともに、社会階層によって異なることも明らかにされている。分析データは、住民の社会階層が大きく異なる東京都の2区それぞれに在住する65歳以上の住民に対する調査から得た。社会階層は就学年数と年取で測定し、健康維持習慣としては、運動、禁煙、栄養摂取の3種類を取り上げた。分析の結果、「未来志向」が就学年数と栄養摂取や禁煙との関連を媒介する要因であることが明らかとなった。

この研究は、科学研究費助成事業「高齢者における社会的不利の重層化の機序とその制御要因の解明」（研究代表者：杉澤秀博）の助成を受けて行った。共同研究者は、原田謙氏（実践女子大学）、杉原陽子氏（首都大学東京）、柳沢志津子氏（徳島大学）、新名正弥氏（桜美林大学）である。

(2) 透析患者における健康格差とその要因に関する研究

本研究では、透析患者における疾病管理行動の社会階層による格差が日本においても存在するか、さらに、その格差を生み出す心理社会的媒介要因を解明することを目的とした。分析データは、全国の透析医療機関に受診する6,644人の血液透析患者を対象とした調査から得た。平均年齢は66.5歳で、男性が65%を占めていた。疾病管理行動は自己申告と検査数値により評価した。社会階層は就学年数と収入で評価した。心理社会的媒介要因は、自己効力感、コントロールへの期待感、社会的支援で評価した。分析の結果、就学年数が長いほど自己申告の疾病管理行動が良好

であること、しかし、収入については、それが高い人ほど自己申告による疾病管理行動が悪いことが明らかとなった。教育年数と疾病管理行動との関連については、自己申告および検査数値のいずれの指標においても、自己効力感とコントロールへの期待感が有意に媒介していることが明らかとなった。収入が疾病管理行動に与える影響については、自己申告および検査数値の指標のいずれの場合も社会的支援が有意に媒介していることが明らかとなった。

以上の研究については、透析医療研究会（研究代表者：杉澤秀博）の研究の一環として、清水由美子氏（東京慈恵会医科大学）、熊谷たまき氏（順天堂大学）、杉崎弘章氏（日本透析医学会）、篠田俊雄氏（日本透析医会）と共同で行っている。

（3）高齢者の介護サービスの利用・利用意識に関する研究

本研究では、高齢者における介護サービスの利用意向が年齢（Age）、時代（Period）、コホート（Cohort）（A-P-C）によって異なるか否かを明らかにすることを目的とした。分析データは、都内の1市において、65歳以上の高齢者に対して1998年から2016年までの間に計6回行われた、繰り返しの横断調査から得た。分析に際しては、性、家族構成、日常生活動作によるA-P-Cの影響の違いにも着目した。介護サービスの利用意向については、要介護状態になった際に「家族による介護」「在宅介護サービスの利用」「施設入所」の3タイプのいずれを選択するかで評価した。統計手法は、A-P-Cそれぞれの独自効果を明らかにするため、The cross-classified random-effect model を用いた。分析の結果、すべての調査データを集積させた分析では「家族による介護」「在宅介護サービスの利用」「施設入所」「無回答／その他」がそれぞれ35%、23%、33%、9%を占めていたことが明らかになった。時代効果については、1998年から2010年までは、「家族による介護」に対比して「在宅介護サービスの利用」の割合が増加していたが、それ以降は横ばいであること、年齢効果については、若い高齢者ほど「家族による介護」に対比して「在宅介護サービスの利用」と「施設入所」の割合が多いこと、さらに、年齢効果については、女性と単独世帯の高齢者で著しいことが明らかになった。さらに、コホート効果については有意でないことが明らかになった。

以上の研究については、杉原陽子氏（首都大学東京）、中谷陽明氏（松山大学）と共同で行っている。

3. 研究業績

【論文】 1) 査読付き

- 1) Sugisawa, H., Harada, K., Sugihara, Y., Yanagisawa, S., Shinmei, M. 2019. Health, psychological, social and environmental mediators between socio-economic inequalities and participation in exercise among elderly Japanese. *Ageing and Society* (in press) .

- 2) Sugisawa, H., Sugihara, Y., Nakatani, Y. 2019. Long-term care preference among Japanese older adults: differences by age, period and cohort. Ageing and Society, Published online: 09 January 2019.
- 3) Sugisawa, H., Sugihara, Y., Kobayashi, E., Fukaya, T., Liang, J. 2018. The influence of lifecourse financial strains on the later-life health of the Japanese as assessed by four models based on different health indicators. Ageing and Society, Published online: 27 June 2018.
- 4) Sugisawa, H., Shinoda T., Shimizu, Y., Kumagai, T., Sugisaki, H. 2018. Unmet service needs evaluated by case managers among disabled patients on hemodialysis. International Journal of Nephrology and Renovascular Disease, 11, 113-123.
- 5) 熊谷たまき, 杉澤秀博. 2019. 中年期の血液透析患者における負担感が抑うつ状態に与える影響. 日本在宅ケア学会誌, (掲載確定)
- 6) 孫潔, 杉澤秀博. 2019. 高齢者向けの学習講座に対する参加者による主観的評価とその関連要因—社会教育施設での学習講座を対象に—. 老年学雑誌 (掲載確定)
- 7) 吉田綾子, 杉澤秀博. 2019. 地域包括支援センターの総合相談に関する業務の実施に関連する要因—社会福祉士に対する調査から—. 老年学雑誌 (掲載確定)
- 8) 早崎広司, 杉澤秀博. 2019. 長寿企業の後継者の視点による先代経営者の経営姿勢・生き方の承継プロセス. 老年学雑誌 (掲載確定)
- 9) 小林由美子, 杉澤秀博, 他. 2019. 高齢期の健康関連の逆境/ストレッサーに対するレジリエンスの概念—Fralnetwork Analysisによる英語文献の検討—. 老年学雑誌 (掲載確定)
- 10) 牛嘯塵, 杉澤秀博. 2018. 中国都市部に在住の中年世代の老親介護における介護サービスの利用希望に関する研究. 日本在宅ケア学会誌, 21, 2, 76-85.
- 11) 押切康子, 杉澤秀博. 2018. 多剤併用の高齢患者の服薬に対する不安に関する質的分析. 日本プライマリ・ケア連合学会誌, 41, 3, 85-91.
- 12) 牧野公美子, 杉澤秀博, 他. 2018. 日本における高齢者の終末期医療に関する家族による代理決定についての文献レビュー. 老年看護学, 23, 1, 65-74.
- 13) 小林由美子, 杉澤秀博, 刈谷亮太, 長田久雄. 2018. 地域在住高齢者における健康関連の逆境に対するレジリエンスの構成概念. 老年社会科学, 40, 1, 32-41.

【論文】 2) 査読なし

- 1) 杉澤秀博. 2018. 福祉ニーズのある高齢者と高齢ボランティアの関係性. 応用老年学, 12, 1, 4-9.
- 2) 杉澤秀博. 2018. 高齢者における健康格差研究のリサーチ・クエスチョン: 社会階層に着目して. 老年社会科学, 40, 1, 59-66.

【学会・招待発表】（筆頭著者のみ）

- 1) 杉澤秀博, 他. 高齢者における時間的展望、社会階層、健康習慣の関連. 第77回日本公衆衛生学会、郡山. 2018.
- 2) 杉澤秀博, 他. 中卒男性高齢者における運動習慣の未実施に至るプロセス. 日本老年社会科学会第61回大会、東京.

【科研費などの助成金】

- 1) 科研費. 高齢者における社会的不利の重層化の機序とその制御要因の解明（研究代表者）.
- 2) 科研費. 地域包括支援センターの保健師による地域診断活動の推進要因の分析：量的・質的な分析（分担研究者）

1. 研究課題

介護予防に関する研究

2. 研究活動の概要

転倒に対する検知センサー付きスマホならびにPC管理システム等の開発研究の一環で、東京都調布市で転倒予防教室「シニアのための転倒予防講座」を実施し、その効果を検討する試みを継続した。2018年度は5回の教室を開催して、ミニ講座、運動指導をおこなった。転倒発生、平衡機能や歩行能力などの身体的要素、満足度やうつ状態などの精神的要素、人間関係などの社会的要素について追跡的に調査して効果の検討を続けている。また、スマホを教室参加者に配布し、転倒事故のモニタリングを行い、その効果・問題点について検討中である。

スピリチュアリティに焦点を当てた健康生活の支援に関する研究の一環として、地域高齢者のスピリチュアリティと身体的、精神・心理的、社会的健康の関係を調べて、スピリチュアリティの関連要因を検討する研究を継続した。今年度は、笑いヨガ、グループ回想法などの効果を、スピリチュアリティ評価尺度、健康度自己評価、うつ状態、唾液アミラーゼなどで検討した。

東京都中央区内で、認知症予防活動をも想定した、世代間交流プログラムの企画、運営に参加、協力した。

また、東京都立川市の老人ホームにおいて、転倒予防プログラムとして運動・体操教室を継続している。

さらに、研究員とともに考案したプログラム（ハッピープログラム）による地域高齢者のうつ予防を目的とした活動・研究を継続中である。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 佐々直紀、新野直明、柴喜崇、山上徹也：認知症予防教室の効果－多面的運動介入とグループワークから成る取り組み－老年学雑誌、査読有、8巻、67-81、2018

【学会発表】

- 1) 久喜美知子、新野直明：公衆栄養学授業の論文購読演習において学生が選択した傾向について、第65回日本栄養改善学会、新潟、2018年9月
- 2) 梶井文子、新野直明、他：地域在住高齢者におけるスマートフォンを用いた多因子介入転倒予防プログラム後の変化：24週間の転倒発生、認識ならびに行動、第5回日本転倒予防学会、浜松、2018年10月
- 3) 三澤久恵、新野直明、他：地域高齢者のスピリチュアリティに視点をあてた健康づくり支援に関する実証研究－Ⅱ、第28回日本健康医学会、東京、2018年11月
- 4) 荒川武士、新野直明、他：脳血管障害者の嚥下障害に関連する運動要因の検討、第16回日本神経理学療法学会学術大会、大阪、2018年11月

【科研費などの助成金】

- 1) 文科省科研費基盤B：高齢者のための在宅継続転倒予防プログラムと検知・支援モニタリング方法の開発と評価（分担）
- 2) 文科省科研費基盤C：地域高齢者のスピリチュアリティに焦点をあてた主体的な健康生活の支援（分担）

【その他の活動】

- 1) 「高齢者のこころの健康について」、横須賀市ハッピープログラム研修、2018年7月
- 2) 「こころを軽くするヒント～高齢期に多いうつ症状」、社会福祉法人至誠学舎立川至誠ホーム 国分寺地域相談センターなみき介護予防教室、2018年9月
- 3) 「生活場面からアセスメント生活リズム（睡眠）薬物による影響のアセスメント」、認定看護師教育課程 認知症看護コース、2018年10月
- 4) 「老年医学 高齢者特有の病気・疾患」、多摩市市民講座老年学入門、2018年10月

1. 研究課題

- (1) 高齢者の介護予防及びヘルスプロモーションに関する研究
- (2) 高齢社会の課題解決に向けたアクションリサーチに関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者の介護予防及びヘルスプロモーションに関する調査研究

①北海道の都市近郊において、地域社会における高齢者の役割を見直すことにより社会参加を促すヘルスプロモーションプログラム実施に伴い、住民主体により創出された地域活動が7年間継続されていることに着目し、地域活動の長期的効果を検証することを目的として分析を行った。その結果、初回調査時の平均年齢は介入地区78.6歳、対照地区79.0歳と有意差はなかった。介入7年後には花壇整備や軽スポーツなどの3つの地域活動が新たに創出されていた。介入地区の分析対象者55人中、参加経験が多かったのは公園清掃ボランティア72.2%、花壇整備63.5%だった。地区の中で7年前に比べて親しくなった人がいる割合は、介入地区52.0%、対照地区31.2%、7年前に比べて地区の連帯が強くなったと感じている割合は介入地区30.6%、対照地区10.0%といずれも介入地区が有意に多かった。初回時の年齢、性別、手段的自立、各指標の初回値を補正した反復測定分散分析の結果、時間×地区の交互作用が有意だったのは地域活動であり、介入地区では地域活動への参加の低下が抑制されていた（介入地区3.02点→2.41点、対照地区2.88点→1.79点）。これらのことから、住民主体により創出された地域活動の長期的効果として地域高齢者全体の社会参加の低下を抑制すること、地域のつながりを強めることが示唆された（日本公衆衛生学会で発表）。

②神奈川県綾瀬市における要介護認定率の低いA地区と高いB地区に住む高齢者の基本属性、健康状態、趣味・習慣的活動、ソーシャル・キャピタル等の違いを明らかにすることを目的に行った郵送調査（2017年度）に基づき、その結果を学会にて報告した（日本作業療法学会）。A地区の高齢者はB地区に比べ、教育年数（高い）、暮らし向き（良好）、主観的健康感（高い）、うつ傾向（低い）、趣味・習慣活動の実施率（高い）、親戚・友人・住民とのネットワーク（良好）等の条件が備わっていた。これらのことから、高齢者にとって様々な趣味・習慣活動に参加できる仕組みづくりが必要であり、それが認定率を抑制することにつながる可能性があることが示唆された。さらに、今年度は綾瀬市の「多様性自発型社会参加促進事業」の一環として趣味・サークル活動などのリーダーを対象として、行政メンバーと協働しながら地域活動の活性化に向けたワークショップを3回実施し、その波及効果についても分析予定である。

(2) 高齢社会の課題解決に向けたアクションリサーチに関する研究

①アクションリサーチの普及と技法の共有を目的として、日本公衆衛生学会において自由集會を開催した。量的研究者がアクションリサーチに取り組む際の課題について参加者との議論を通じて共有することができた。また、アクションリサーチの展開方法や活動の評価、とくに経過評価の技法開発に向けて研究会を発足させた。

②科学研究費による「当事者参加型アクションリサーチによる認知症の人と家族介護者にやさしい共生社会創造」研究では、町田市認知症友の会のメンバーと協働して「在宅での認知症の人の家族介護に関するアンケート調査」を行った。現在、302名の家族介護者から回答（回収率34.8%）が得られている。今後、アンケート調査結果に基づいて「認知症になっても住みよいまちづくりプロジェクト」を立ち上げ、解決策の検討を行う予定である。

3. 研究業績

【著書】

- 1) 芳賀 博、高齢者の保健医療対策；保健医療サービス 第4版（社会福祉士シリーズ 17）、弘文堂、62-69、2019年3月

【論文】

- 1) 竹内亮、植木章三、上出直人、高戸仁郎、金子勝司、陳洋明、曾根裕二、安田友紀、萩野浩明、小川晃子、芳賀博、地域在住高齢者における歩行時の身体動揺に関連する要因について、大阪体育大学教育学研究、2巻、1-12、2018
- 2) 三島富有、池田晋平、芳賀博、ペットと高齢者の健康に関する研究、老年学雑誌、第9号、33-47、2019

【学会発表】

- 1) 吉田裕人、植木章三、犬塚剛、佐藤敬広、安齋紗保理、柴喜崇、芳賀博、地域高齢者の社会参加活動が将来の精神健康状態に及ぼす影響に関する研究、第77回日本公衆衛生学会総会、郡山、2018.10.25
- 2) 犬塚剛、植木章三、吉田裕人、佐藤敬広、芳賀博、地域高齢者における居住満足度の低下を抑制する要因、第77回日本公衆衛生学会総会、郡山、2018.10.25
- 3) 佐藤美由紀、若山好美、吉田裕人、芳賀博、アクションリサーチにより創出された住民主体による地域活動の長期効果、第77回日本公衆衛生学会総会、郡山、2018.10.26
- 4) 植木章三、佐藤敬広、片倉成子、犬塚剛、吉田裕人、安齋紗保理、柴喜崇、本間洋子、佐々木秀美、芳賀博、中山間地域在住高齢者における携帯端末の利用状況と利用者の特性、第77回日本公衆衛生学会総会、郡山、2018.10.26

- 5) 池田晋平、山根健一、鈴木武志、佐藤美喜、芳賀博、要介護認定率が低い地区に在住する高齢者の活動・参加とソーシャル・キャピタルの特徴－要介護認定率が異なる2地区の比較分析から－、第52回日本作業療法学会、名古屋、2018.9.8
- 6) 柴喜崇、佐藤美由紀、植木章三、芳賀博（世話人）、アクションリサーチの普及と仲間づくり、第77回日本公衆衛生学会総会、自由集会、郡山、2018.10.24

【科研費などの助成金】

- 1) 科学研究費 基盤研究（C）

研究課題名：住民主体による高齢者の地域活動促進プログラムの健康増進及び介護予防への長期効果（代表）

- 2) 科学研究費 基盤研究（C）

研究課題名：当事者参加型アクションリサーチによる認知症の人と家族介護者にやさしい共生社会創造（分担）

【その他の研究活動】

綾瀬市に在住する高齢者の健康と生活に関する調査報告書、2018

1. 研究課題

- (1) 70歳以上高齢者の至適Body Mass Indexに関する研究
- (2) 高齢労働者の健康管理のあり方に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 70歳以上高齢者の至適 Body Mass Index に関する研究

【目的】日本人の食事摂取基準（2015年版）による70歳以上の目標とするBody Mass Index（BMI）の範囲（21.5～24.9 kg/m²）に着目し、70歳以上高齢者のBMIおよび喫煙状況と自覚症状との関連を横断的に明らかにする。

【方法】2017年4月にA村にて実施された国民健康保険特定健康診査・後期高齢者健診を受診した70歳以上の高齢者747名を対象とした。自覚症状は問診にて把握した。連結不可能匿名化されたデータを用いて、BMI区分（18.5未満、18.5以上21.5未満、21.5以上25.0未満、25.0以上）および喫煙状況（吸わない、やめた、喫煙習慣有）を固定因子、性別および年齢を共変量とした一般線形モデルにて、それぞれの自覚症状との関連を検討した。自覚症状は、有=100、無=0として、調整済平均が%を表すようダミー変数化してモデルに投入した。全項目の測定値が得られた693名（男性300名、女性393名）、78.0±5.4歳（平均±標準偏差）を分析対象とした。

【結果】5%以上にみられた自覚症状は、多いものから順に、視力の低下（35.4%）、腰痛・関節痛（35.1%）、目の疲れ（21.0%）、耳鳴り（14.4%）、便秘（14.2%）、頻尿（8.8%）、咳（7.3%）、痰（6.6%）、めまい（6.5%）、頭痛（5.5%）、動悸（5.3%）であった。頭痛、目の疲れ、腰痛・関節痛は女性の方が有意に多く、痰、頻尿、残尿感は男性の方が有意に多かった。BMI区分および喫煙状況の有意な主効果が認められた自覚症状は、めまい、動悸のみであった。めまいの性・年齢調整済み頻度は、BMI18.5未満群では37.5%であり、BMI18.5以上21.5未満群（5.5%）、BMI21.5以上25未満群（9.9%）、BMI25以上群（4.7%）より有意に高かった。動悸の性・年齢調整済み頻度は、BMI18.5未満群では39.3%であり、BMI18.5以上21.5未満群（6.0%）、BMI21.5以上25未満群（6.5%）、BMI25以上群（5.0%）より有意に高かった。めまい、動悸ともBMI区分と喫煙状況の有意な交互作用がみられ、いずれも喫煙習慣有群のBMI18.5未満群の自覚症状有の頻度が著しく高かった。

【結論】70歳以上のBMI区分と自覚症状との関連では予想に反し、BMI18.5未満群で「めまい」「動悸」の比較症状が多かった。また、この関連は喫煙習慣があることによりさらに増大した。

(2) 高齢労働者の健康管理のあり方に関する研究

【目的】 高齢労働者の健康管理のあり方を検討するため、高齢者の就業の実態を明らかにし、高齢就業者の健康状態と高齢非就業者の健康状態の相違を明らかにする。

【方法】 2012年12月に札幌市A区の在宅高齢者約31000人から無作為抽出した2500人を対象とし、郵送法により、対象の、属性、健康・医療・介護・生活のニーズ/サービス利用等を自記式質問紙にて調査した。性・5歳年齢階級ごとの就業状況、介護支援ボランティア活動への参加状況、就業の有無別に、健康状況、1年間の転倒既往率等を比較した。

【結果】 返送のあった1712件中、有効回答1688件について分析を行った。性別・5歳年齢階級別就業者割合は、65-69歳では、男性40.1%、女性18.1%と比較的高かったが、70-74歳では、男性14.1%、女性9.2%と低くなり、75歳以上では10%未満であった。介護支援ボランティア活動は、全体で3.4%の人が既に参加しており、「参加したい」との回答が約6%、「興味はある」との回答が半数以上を占め、介護分野での高齢者就業の可能性が示唆された。就業者と非就業者の健康状態の比較では、就業者の方が全般的に健康状態は良好であったが、就業者の70.3%に持病があり、67.4%が服薬していた。また、1年間の転倒発生率は男性19.2%、女性25.3%と比較的高く、非就業者との有意差もなかった。情緒的・手段的サポート源がない人の割合も意外に多く非就業者と同程度であった。

【結論】 就業者の約7割に持病があり、服薬中の者も多いことから、健康診断や日常の健康管理をより厳重に行う必要がある。また、年間転倒発生率は約2割で非就業者とほぼ同じであることから、高齢者の労災に多い転倒や転落を防ぐための適切な職場配置、環境整備も重要である。さらに、情緒的・手段的サポート源がない割合も非就業者とほぼ同じであり、社会的孤立予防対策は就業している人にとっても必要性が大きいことが明らかとなった。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 渡辺修一郎：社会的フレイルの予防。健康づくり，491，17，2019.
- 2) 渡辺修一郎：高齢者の健康にとって望ましい働き方とその指導法。日本医事新報，（4909），55，2018.
- 3) 齋藤崇志，井澤和大，渡辺修一郎：基本的日常生活活動動作の自立度および困難感の測定。応用老年学，12(1)，49-58，2018.
- 4) 根本祐太，倉岡正高，野中久美子，田中元基，村山幸子，松永博子，安永正史，小林江里香，村山洋史，渡辺修一郎，稲葉陽二，藤原佳典：若年層と高年層における世代内/世代間交流と精神的健康状態との関連。日本公衆衛生雑誌，65（12），719-729，2018.

【学会発表】

- 1) 森田泰裕, 新井智之, 渡辺修一郎: 地域在住高齢者における新規要介護発生と基本チェックリスト変化量の関連. 第77回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018.10.26.
- 2) 渡辺修一郎, 井上智代: 70歳以上高齢者のBody Mass Indexおよび喫煙状況と各種自覚症状との関連. 第77回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018.10.26.
- 3) 井上智代, 渡辺修一郎: 農村のソーシャル・キャピタルと65歳以上高齢者の健康診査結果との関連. 第77回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018.10.25.
- 4) 小林江里香, 野中久美子, 倉岡正高, 村山洋史, 村山幸子, 田中元基, 根本裕太, 松永博子, 村山陽, 渡辺修一郎, 稲葉陽二, 藤原佳典: 地域住民による子育て支援と子育て世代の居住満足度との関連. 第77回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018.10.25.
- 5) 新井智之, 森田泰裕, 高塚奈津子, 藤田博暁, 岡持利亘, 渡辺修一郎: 自主グループ活動参加者の要介護予防効果の検証－傾向スコアマッチングを用いた検討. 第77回日本公衆衛生学会総会, 福島, 2018.10.24.
- 6) 植田拓也, 柴喜崇, 渡辺修一郎: 冬期, 早朝の屋外での体操実施における体操前後の循環動態の変動: ラジオ体操を含む軽運動の実施についての検討. 第13回日本応用老年学会大会, 東京, 2018.10.21.
- 7) ブラナン野口純代, 渡辺修一郎, 橋本由美子, 長田久雄: ユニット型特養における施設環境と認知症高齢者の生活の質との関連. 第13回日本応用老年学会大会, 東京, 2018.10.21.
- 8) 村山幸子, 小林江里香, 倉岡正高, 野中久美子, 安永正史, 田中元基, 松永博子, 村山洋史, 渡辺修一郎, 藤原佳典: 世代性の規定要因に関する探索的検討－都市部高齢者を対象とした調査から. 日本老年社会学会第60回大会, 東京, 2018.6.10.
- 9) 根本裕太, 倉岡正高, 野中久美子, 田中元基, 村山幸子, 松永博子, 安永正史, 小林江里香, 村山洋史, 渡辺修一郎, 藤原佳典: 若年層と高年層における世代内/世代間交流と精神的健康状態との関連. 日本老年社会学会第60回大会, 東京, 2018.6.10.
- 10) 渡辺修一郎: 高齢労働者の健康管理. シンポジウム「地域包括ケア時代の高齢者就業支援－エイジレス就業に向けた現状と課題－」, 日本老年社会学会第60回大会, 東京, 2018, 6.9

【科研費などの助成金】

- 1) 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(A)): 大都市求職高齢者の実態解明およびシームレスな社会参加支援に向けた研究(分担研究者)
- 2) 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)): 高齢難聴患者の対処行動を支援するための患者・看護師への研修の開発(分担研究者)
- 3) 国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)社会技術研究開発センター(RISTEX)戦略的創造研究推進事業(社会技術研究開発): ジェネラティビティで紡ぐ重層的な地域多世代共助システムの開発(分担研究者)
- 4) 長寿医療研究開発費: 長寿コホートの総合的研究「地域差研究・生活機能研究」(分担研究者)

- 5) 厚生労働省：平成30年度 老人保健健康増進等事業「官民共同による地域の実情に応じた特徴的な通いの場等の立ち上げに関する調査研究事業」（事業担当者）

【その他】

- 1) 渡辺修一郎：高年齢者の就労と健康との関係. 桜美林大学大学院老年学研究科・大原記念労働科学研究所 合同公開講座, 桜美林大学四谷キャンパス, 2018.5.26
- 2) 東京都健康長寿医療センター研究所, 社会参加と地域保健研究チーム協力研究員として, 社会参加と地域保健に関する研究に従事.
- 3) 世田谷区健康きたざわプラン推進委員として健康きたざわプランの評価に関する研究に従事.
- 4) 志木市介護保険事業計画策定委員会委員として志木市介護保険事業計画に関する調査研究に従事.
- 5) 世田谷区地域保健福祉審議会高齢者福祉・介護保険部会委員として世田谷区の介護保険事業計画に関する調査研究に従事.
- 6) 渡辺修一郎監修：健康×大井競馬場. TCK NEWS 冬の特別号, 2019.
- 7) 夕刊フジへの解説・コメント
 - ①定年後難民にならない生き方60 冬本番「見落としがちな老親の体調管理」2018.12.13
 - ②定年後難民にならない生き方56 高齢者インフルに潜む寝たきりリスク. 2018.11.15.
 - ③定年後難民にならない生き方55 インフルエンザ予防接種は11月中に. 2018.11.8.

1. 研究課題

農村のソーシャル・キャピタルを活用した地域包括ケアシステムのあり方に関する研究

2. 研究活動の概要

厚生労働省による地域包括ケアシステムの中で、自助・互助・共助・公助の4つの助けが効果的に機能することの重要性がいわれている。地域の中で、人々のつながりをもとに醸成されるソーシャル・キャピタルを活用し、高齢者がいきいきと生活するためのケアシステムをいかに構築するかが喫緊の課題である。

これまで、農村で生活する人々の健康に資するソーシャル・キャピタルを「自然との共生」「農村ならではの信頼関係の維持」「農村の社会規範を重んじる」「農村であることを活かした社会参加とネットワーク」の視点で包括的に判定できる指標（農村SC指標）の開発を試みてきた。今年度は地区レベルの農村SC指標得点と、健診データとの関連性を明らかにすることを目的とし、分析を行った。

健診結果との関連については「農村ならではの信頼関係の維持」「農村の社会規範を重んじる」「農村を活かした社会参加とネットワーク」「農村SC指標総得点」が高いと「最低血圧」の値が低い、「自然との共生」が高いと「HDL-C」が高い、「農村ならではの信頼関係の維持」が高いと「LDL-C」が低いという組合せで弱い相関が認められた。生活習慣との関連については、「自然との共生」「農村の社会規範を重んじる」「農村であることを活かした社会参加とネットワーク」と「飲酒をする頻度」が多いという組合せで弱い相関が認められた。なお、本研究内容については第77回日本公衆衛生学会総会で発表した。今後も更なる調査・分析を進めていく予定である。

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 井上智代, 渡辺修一郎. 農村のソーシャル・キャピタルと65歳以上高齢者の健康診査との関連. 第77回日本公衆衛生学会総会（福島市）（2018.10.25）
- 2) 渡辺修一郎, 井上智代. 70歳以上高齢者のBody Mass Indexおよび喫煙状況と各種自覚症状との関連. 第77回日本公衆衛生学会総会（福島市）（2018.10.25）
- 3) 飯吉令枝, 井上智代, 井比祐未. 住民代表者と専門職からみたA豪雪地域に暮らす高齢者の栄養・食生活行動の現状. 第77回日本公衆衛生学会総会（福島市）（2018.10.25）

- 4) 井比祐未, 井上智代, 飯吉令枝. 豪雪地域の食生活におけるソーシャル・キャピタルの現状
第77回日本公衆衛生学会総会(福島市) (2018.10.25)
- 5) 高林知佳子, 平澤則子, 飯吉令枝, 井上智代, 野口裕子, 久保野裕子. 住民との協働による
パートナーシップ型地域診断実習が地域に与える影響. 第77回日本公衆衛生学会総会(福島
市) (2018.10.25)
- 6) 井上智代, 高林知佳子, 駒形三和子. パーキンソン病による嚥下障害におけるリハビリテー
ションについての文献検討. 第23回日本難病看護学会学術集会
(上越市) (2018.7.22)

【科研費などの助成金】

科学研究費基盤研究(C) 豪雪地域高齢者の運転免許返納後の健康・生活行動の維持とその要
因に関する縦断的研究(分担研究者)

1. 研究課題

- (1) 市区町村レベルにおける経済格差と自殺率との関連性の分析
- (2) 在宅医療における医療の質の評価指標に関する意識調査
- (3) 日本版Age Friendly Cities (AFC) 指標を用いた社会環境要因と高齢者の健康との関連性の検証

2. 研究活動の概要

(1) 市区町村レベルにおける経済格差と自殺率との関連性の分析

日本では2006年に自殺対策基本法を制定して以降、自殺対策を進めている。特に、高齢者の自殺は、自殺者総数の4割を占めており、自殺予防対策の重点対象となっている。自殺には、うつ病などの精神疾患への罹患や喪失体験、孤立以外にも、経済的理由が大きな要因になっている。地域レベルの自殺対策を評価するものとして、経時的なモニタリングや地域間比較などが可能な指標の開発が期待されるものの、そのような研究は十分に行われていない。

そこで、本研究では、地域間比較が可能なモニタリング指標の開発に向けた知見を得るために、2時点の地域相関分析によって、市区町村レベルの自殺率と経済格差（ジニ係数）との間の相関と経済格差が自殺率に与える影響を明らかにすることを目的とした。

分析には、日本老年学的評価研究（JAGES）の2013年調査と2016年調査の両方に参加している59市区町村、223,370人分のデータと市区町村別の自殺率のデータ（厚生労働省）を用いた。

その結果、59市区町村の10万人当たりの自殺率の平均は、2013年19.9人（範囲13.2-29.9）、2016年17.5人（範囲10.1-35.0）であった。ジニ係数は、2013年と2016年ともに平均では0.30で同じであったが、市区町村間の最大と最小の間に0.09～0.11（範囲2013：0.28～0.37、2016：0.27～0.38）の差がみられた。自殺率とジニ係数との間には両年ともに正の相関がみられ、ジニ係数が高い（経済格差が大きい）市区町村で自殺率が高かった（ $r=0.5$ （2013）、 $r=0.6$ （2016）、 $p<0.001$ ）。いくつかの社会的環境要因の変数を調整変数として投入した重回帰分析の結果からも、ジニ係数は自殺率に有意な影響を及ぼす変数であることが示された（ $p<0.001$ ）。

本研究の結果、経済格差が大きい市区町村で自殺率は高かった。自殺対策関連のモニタリング指標の一つとしてジニ係数が有用である可能性や、経済格差を小さくする政策が自殺の抑制に寄与する可能性が示された。

(2) 在宅医療における医療の質の評価指標に関する意識調査

本研究では、在宅医療の質を評価する指標の開発に向けて科学的根拠を得ることを目的とし、在宅医療従事者が重要であると認識している在宅医療の質の評価項目について検証した。先行研究の検討および在宅医療の専門家との検討会を通して、在宅医療の質の評価に関する項目を設定し調査票を作成した。その調査票を用い、全国在宅医療支援診療所連絡会に登録されている診療所901箇所を対象として郵送調査を行った。その結果、394箇所（回収率：43.7%）から回答があった。

在宅医療の従事者が在宅医療の質を評価するうえで特に重要であると考えられる項目について5点満点の尺度で聞いた結果、患者や家族のQOLに関わる変数で高い点数を示した。他方で、生命予後が長いこと（3.22点）、在宅での看取り率が多いこと（3.52点）、夜間・休日の緊急対応率が多いこと（3.54点）は相対的に低い点数であった。

医療の質の評価については1980年代より研究されてきたものの、それらの中心は病院医療を対象にしたものであった。本研究の結果から、在宅医療の質を把握する際には、病院医療で重視される患者のアウトカムだけでなく、患者の生活状況の把握や、患者・家族への支援や理解、患者・家族満足、そして組織間の連携など、患者や家族のQOLを踏まえながら幅広く考慮する必要があると考えられる。

(3) 日本版 Age Friendly Cities(AFC) 指標を用いた社会環境要因と高齢者の健康との関連性の検証

高齢化が急速に進む日本においては、高齢者の健康で幸せな暮らしへの関心が高まっている。厚生労働省「健康日本21(第2次)」では、高齢者の幸せな暮らしに大きな影響を与える要因である健康に関して、社会環境の違いによって集団間に「格差」があることを指摘している。その格差を縮小するために「社会全体が相互に支え合いながら、国民の健康を守る環境を整備する」ことを目指すとしている。

WHOは地域の「社会環境」の改善を促すために、「まち（city）」の社会環境と健康の格差の評価ツールとして、Age friendly Cities (AFC) を提唱してきた。しかし、日本では健康に影響を与える社会環境要因や地域レベルでの研究についての科学的な検証は必ずしも十分に行われていない状況である。

本研究ではAFCの概念を構成する8領域（①野外空間・建築物、②交通、③住宅、④尊敬・社会的包摂、⑤市民参加・雇用、⑥社会参加、⑦地域・保健サービス、⑧コミュニケーション・情報）と高齢者の健康との関連性を明らかにすることを目的とする。

調査対象は「第7期介護保険事業策定のための日常生活圏域ニーズ調査データの分析支援プロジェクト」に参加する約100市町とする。AFCの8領域の現状について100市町を対象に調査し、その結果と各市町村の日常生活圏域ニーズ調査や特定健診・保健指導データなどの分析結果との関連性を検証する。

本研究を行うことにより、①AFCの概念を構成する8領域のうち、どの領域が高齢者の健康と強く関連するのか、②社会環境の目標値の設定やモニタリング、③各市町村の特徴や課題の発見、④地域間の比較やベンチマークが可能になると思われる。

3. 研究業績

【論文】

- 1) Izumi Takeuchi, Yoshihiro Yoshimura, Sayuri Shimazu, Seungwon Jeong, Makio Yamaga, Hiroaki Koga. Effects of Branched-Chain Amino Acids and Vitamin D Supplementation on Physical Function, Muscle Mass and Strength, and Nutritional Status in Sarcopenic Older Adults Undergoing Hospital-Based Rehabilitation: A Multicenter Randomized Controlled Trial. *Geriatrics & Gerontology International*, 19(1), 12-17, 2019
- 2) Takao Suzuki, Seungwon Jeong, Yasuyuki Arai, Yusuke Inoue, Masahiko Fukuchi, Yoshimichi Kosaka, Hideki Ohta. Comparative Study on Change in Degree of Independent Living between Continuation and Discontinuation of Home Medical Care among the Elderly in Japan. *Journal of Geriatric Medicine and Gerontology*, 4(1), 1-7, 2018
- 3) Tami Saito, Chiyo Murata, Seungwon Jeong, Yusuke Inoue, Takao Suzuki. Prevention of accidental deaths among people with dementia missing in the community in Japan, *Geriatrics & Gerontology International*, 1301-1302, 2018
- 4) 井手一茂, 鄭丞媛, 村山洋史, 宮國康弘, 中村恒穂, 尾島俊之, 近藤克則. 介護予防のための地域診断指標—文献レビューと6基準を用いた量的指標の評価. *総合リハビリテーション*, 46(12) : 1205-1216, 2018
- 5) 鄭丞媛, 井上祐介, 斎藤民, 村田千代栄, 鈴木隆雄. 認知症の徘徊により行方不明になった者の特徴と自治体の徘徊対策の現状—A県の全市町村を対象にした調査から—. *日本認知症ケア学会誌*, 17(2) : 457-463, 2018

【学会発表】

- 1) Seungwon Jeong, Yusuke Inoue, Yasuyuki Arai, Takao Suzuki. Factor analysis for the development of evaluation index for quality of home medical care. *Nursing Home Research International Working Group Long-Term Care Research*, Sep 13-14, 2018, Rome, Italy
- 2) 鄭丞媛, 井上祐介, 井手一茂, 中村恒穂, 尾島俊之, 近藤克則. 市区町村レベルにおける経済格差と自殺率との関連性の分析. 第28回日本疫学会学術総会, 2019.1.30, 東京
- 3) 井手一茂, 鄭丞媛, 宮國康弘, 近藤克則. 都市・農村における市町村レベルの社会参加と主観的健康感の関連 : JAGES横断研究. 第28回日本疫学会学術総会, 2019.1.30, 東京
- 4) 井手一茂, 鄭丞媛, 宮國康弘, 浅田菜穂, 近藤克則. 地域レベルのスポーツの会参加割合と1～3年後の介護サービス受給率の関連 : エコロジカル分析. 第5回地域理学療法学会, 2018.12.8, 横浜
- 5) 井手一茂, 鄭丞媛, 宮國康弘, 近藤克則. 介護サービス受給率を予測する地域組織への参加割合—介護予防における地域診断指標の予測妥当性—. 第77回日本公衆衛生学会, 2018.10.24, 福島

- 6) 井手一茂, 鄭丞媛, 宮國康弘, 近藤克則. 市町村レベルの社会参加活動割合と要介護リスク者割合の関連: エコロジカル分析. リハビリテーション・ケア合同研究大会2018, 2018.10.3, 米子

【学会発表】

- 1) 科学研究費基盤研究 (C) (一般, 課題番号17K04305) 「Age Friendly Cities (AFC) 指標の開発と信頼性・妥当性の検証」 (研究代表者: 鄭丞媛) 平成29度-平成32年度
- 2) 平成30年度長寿医療研究開発費 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター) 「日本版 Age Friendly Cities指標を用いた社会環境要因と高齢者の健康との関連性の検証」 (研究代表者: 鄭丞媛) 平成30年4月-平成31年3月
- 3) 平成30年度長寿医療研究開発費 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター) 「ソーシャル・キャピタルとNon-communicable Disease (NCD) の研究」 分担研究者 (研究代表者: 近藤克則)
- 4) 平成30年度革新的自殺研究推進プログラム (国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター) 「社会格差が自殺や精神的健康に及ぼす影響に関する社会疫学的影響評価研究」 分担研究者 (研究代表者: 近藤克則)

1. 研究課題

社会福祉士および介護福祉士国家試験合格のための支援に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 介護福祉士国家試験・社会福祉士国家試験 受験対策図書の執筆

全国社会福祉協議会、中央法規出版、メディックメディアの受験対策図書等を執筆した。

(2) 社会福祉士国家試験 受験対策セミナーの講師

中央法規出版の受験対策セミナーの講師を務めた。

(3) 介護福祉士国家試験 受験対策セミナーの講師

静岡福祉大学、読売理工医療福祉専門学校、中央法規出版、クローバーメディカル・ケア・アカデミーの受験対策セミナー講師を務めた。

(4) 介護職員初任者研修の講師

藤沢市社会福祉協議会の介護職員初任者研修の講師を務めた。

3. 研究業績

【著書】

- 1) 『社会福祉学習双書2018 第15巻 介護概論』共著、pp.168-176、澤田信子、大島憲子、井上千津子、岡田史、中山幸代、鈴木知佐子、石井享子、大根静香、伊藤八寿子、横井雅代、石井忍、久保田祐子、青木宏心、檜垣昌也、小櫃芳江、西井啓子、森由香子、全国社会福祉協議会、東京、2018年2月。
- 2) 『クエスチョンバンク 介護福祉士国家試験問題解説2019』共著、pp.84-87、青木宏心、赤羽克子、秋山美栄子、大西丈二、奥田紀久子、加藤英池子、後藤佳苗、佐伯久美子、櫻井恵美、佐々木宰、佐藤富士子、鈴木政史、角田ますみ、竹田幸司、谷口泰司、中津川かおり、濱田竜也、林裕栄、松村美枝子、馬淵敦士、南牧生、宮崎伸一、メディックメディア、東京、2018年4月。

- 3) 『介護福祉士国家試験過去問解説集 2019』共著、pp.127、pp.136-139、青木宏心、石井梨絵、石岡周平、伊東一郎、井上修一、岩川亮太、大田京子、太田つぐみ、大西典子、大谷佳子、亀島千枝、金美辰、小林哲也、白井孝子、竹田幸司、谷功、千葉安代、中岡勉、長山圭子、能田茂代、長谷川晴美、馬場千草、東野幸夫、東原由佳、廣瀬圭子、福島岳志、堀米史一、本間美幸、前田美貴、宮元預羽、森聖志、八城薫、山田誠峰、山田弥生、渡辺明広、渡邊祐紀、中央法規出版、東京、2018年4月。
- 4) 『介護福祉士国家試験 らくらく暗記マスター2019』共著、pp.14-69、青木宏心、佐伯久美子、松崎匡、中央法規出版、東京、2018年6月。
- 5) 『社会福祉士国家試験 らくらく暗記マスター2019』単著、pp.12-181、青木宏心、中央法規出版、東京、2018年6月。
- 6) 『介護福祉士国家試験 書いて覚える合格ドリル2019』共著、pp.14-20、pp.28-66、青木宏心、佐伯久美子、竹田幸司、渡邊祐紀、中央法規出版、東京、2018年5月。
- 7) 『おはよう21』、「介護福祉士国家試験 科目別学習ポイント」単著、中央法規出版、東京、2018年5月号～2019年2月号（全10回連載）

【その他の研究活動】

- 1) 介護福祉士国家試験受験対策講座 講師
 - ①読売理工医療福祉専門学校：制度系科目【東京】（2018年8月7日）
 - ②静岡福祉大学：制度系科目【静岡】（2018年9月24日）
 - ③静岡福祉大学：医療系科目、介護系科目【静岡】（2018年9月25日）
 - ④クローバーメディカル・ケア・アカデミー：全科目【埼玉】（2018年10月14日）
 - ⑤クローバーメディカル・ケア・アカデミー：全科目【埼玉】（2018年11月4日）
 - ⑥クローバーメディカル・ケア・アカデミー：全科目【埼玉】（2018年12月2日）
 - ⑦中央法規出版：全科目【大阪】（2018年12月8日）
 - ⑧静岡福祉大学：全科目【静岡】（2018年12月9日）
 - ⑨中央法規出版：全科目【東京】（2018年12月15日）
- 2) 社会福祉士国家試験受験対策講座 講師
 - ①中央法規出版：専門科目【東京】（2018年12月22日）
 - ②中央法規出版：共通科目【東京】（2018年12月23日）
 - ③中央法規出版：専門科目【大阪】（2019年1月12日）
 - ④中央法規出版：共通科目【大阪】（2019年1月13日）

3) 介護職員初任者研修 講師

- ①藤沢市社会福祉協議会：「自立に向けた介護」【神奈川】（2018年8月11日）
- ②藤沢市社会福祉協議会：「介護の基本的な考え方」【神奈川】（2018年10月6日）
- ③藤沢市社会福祉協議会：「快適な住環境整備と介護」【神奈川】（2018年10月6日）
- ④藤沢市社会福祉協議会：「介護過程の基礎的理解」【神奈川】（2018年11月25日）

4) 留学生支援関係

- ①学校法人KAIGO日本語学院 集中講義【プノンペン】（2018年3月14日～15日）

5) 社会的活動

- ①社会福祉法人仁正会 評議員
- ②社会福祉法人相模翔優会 第三者委員

1. 研究課題

高齢者領域における音楽プログラムの可能性と課題

2. 研究活動の概要

高齢者対象の音楽プログラムは、各種施設や病院、地域、介護予防事業などにおいて、音楽療法、レクリエーションなどの名称や枠組みとして幅広く実践されている。担当しているのは療法家、演奏家、施設などの各職種職員、地域のボランティアなど様々である。

高齢者像や求められる内容は、時間経過と共に変化している。実践を通して、改めて音楽プログラムのさらなる効果の可能性や課題を探ることを継続中である。

(1) 施設入居者対象の実践

特別養護老人ホームでは入居者の心身状態変化により、反応が乏しくなったことが顕著であった。また施設側の運営状況により、継続が困難になった。そこで外来講師のプログラムを終了した。高齢者の心身変化への対応や運営などの課題が残された。

(2) 軽度認知障害高齢者対象の実践

メンタルクリニックでは、軽度認知障害高齢者を対象に音楽プログラムを実践している。精神保健福祉士、看護師、心理士などの職員も同席している。内容は簡単な体操、口腔ケア、脳トレ、歌唱や楽器活動、回想法などである。職員は20～40歳代であり、使用する曲や時代背景を知らない事実があり、職員にも様々な刺激となっている。

(3) 認知症カフェにおける実践

上記のメンタルクリニックは認知症疾患医療センターとなっており、区の助成金を得て認知症カフェを開催している。軽度認知障害の本人や介護家族、関係諸機関の職員などの様々な顔ぶれが参加している。毎回主プログラムが設定され、その枠で音楽療法として実践する機会もある。また、参加者達と歌う時間を担当している。短時間のこのひと時が場のまとまりができる時間として定着し、カフェの特徴の一つとなっている。

他の地域で開催されている認知症カフェへの参加や研修会、音楽プログラムの実践を通して、認知症カフェの可能性や課題を探ることも継続中である。

3. 研究業績

【その他の活動】

- 1) 看護学生対象の選択科目「スピリチュアルケア」で、音楽療法の講義を1コマ担当。
- 2) 精神保健福祉士資格での精神科訪問看護（認知症グループホーム入居者対象）。
- 3) 在宅一般住民向けの「音楽療法及び認知症」についての講演。
- 4) 認知症友の会定例会における音楽療法実践。
- 5) 自費対応の学校形式の教室で、音楽による脳トレを含めた音楽療法・回想法の実践。
- 6) 様々なアクティビティ実践者達と地域密着の実践をするための準備が進み、次年度から具体的な活動へ移行予定。

1. 研究課題

地域在住高齢者におけるIADL困難感に関する研究

2. 研究活動の概要

高齢者の日常生活活動（Activities of Daily Living; ADL）の評価において、「できる」「できない」の能力だけでなく、「困難感」の評価も重要であることが示されている。歩行などの基本的ADLの困難感について研究が進められるようになってきたが、生活機能の高い地域在住高齢者を対象とする場合には、買い物などの手段的ADL（Instrumental ADL；IADL）の評価も重要であると考えられる。本研究では、地域在住高齢者のIADL困難感の実態およびその関連因子について、身体的側面、社会的側面、心理的側面から検討した。

対象者はK県A市在住の65歳以上の高齢者とし、広報誌を用いて調査の参加者を募り118名（男性32名、女性86名、74.3±5.3歳）より協力を得た。調査は会場参加型にて行い、自記式アンケート、身体機能測定、認知機能検査を実施し、基本属性、IADL困難感、身体的側面（5m歩行時間（最速））、社会的側面（社会的ネットワーク（LSNS-6））、心理的側面（うつ（GDS-15））、認知機能（TDAS（TDASプログラム、日本光電））を調査した。IADL困難感は、老研式活動能力指標の下位項目である手段的自立の5項目それぞれの困難感を尋ね、5項目のうち1項目以上困難感がある場合に「IADL困難感あり」とした。

IADLに困難感のある者は、「バスや電車の利用」で24.6%、「日用品の買い物」で22.9%、「食事の用意」で28.0%、「請求書の支払い」で13.7%、「貯金の出し入れ」で13.6%であり、「IADL困難感あり」の者は40.2%であった。多変量解析の結果、うつが関連因子として抽出され、身体機能、社会的ネットワーク、認知機能では有意な関連が見られなかった。

本研究の結果より、IADL困難感には、身体的側面や社会的側面は関連せず、うつが関連していることが明らかとなった。うつは日常生活に消極的になることが多く、その結果、IADLに困難を感じていると考えられた。

3. 研究業績

【学会発表】一般発表

- 1) 安齋紗保理, 植田拓也, 佐々直紀, 柴 喜崇: 地域在住高齢者におけるIADL困難感の現状とその関連因子. 第4回日本予防理学療法学会集会(福岡). 2018年10月

1. 研究課題

- (1) 要介護認定を受けている高齢者の主観的健康感に関する研究
- (2) 東京都大田区における作業療法士の復職・就労支援の実態と課題

2. 研究活動の概要

(1) 要介護認定を受けている高齢者の主観的健康感に関する研究

要介護認定を受けている高齢者の主観的健康感の判断基準を明らかにする質的研究を実施している。

研究の進捗状況として、現在東京都内のデイケアに通所している高齢者15名のインタビューを終え、内容を質的記述的に分析している。

(2) 東京都大田区における作業療法士の復職・就労支援の実態と課題

2016年に実施した調査をもとに現在論文を投稿中である。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 三島富有, 池田晋平, 芳賀博: ペット飼育の有無と高齢者の身体的・心理的・社会的健康の関連, 老年学雑誌 (印刷中) .

【学会発表】

- 1) 要介護認定率が低い地区に在住する高齢者の活動・参加とソーシャル・キャピタルの特徴 (第52回日本作業療法学会, 名古屋, 2018年9月8日)

1. 研究課題

- (1) 運動習慣のある地域在住高齢者の身体、精神機能、社会的紐帯などの縦断調査
(10年間の縦断調査)
- (2) 座間市介護予防事業での認知機能低下予防教室の開催
- (3) 都内区市町村における地域づくりによる介護予防の推進に関する調査

2. 研究活動の概要

(1) 運動習慣のある地域在住高齢者の身体、精神機能、社会的役割などの縦断調査 (10年間の縦断調査)

体操習慣のある地域在住高齢者の身体機能、生活機能および精神的健康度経年変化を明らかにするために、神奈川県相模原市のラジオ体操を実施している高齢者の身体機能測定、質問紙調査を実施した。

(2) 座間市介護予防事業での認知機能低下予防教室の開催

神奈川県座間市において、行政と協働して認知機能低下予防の介入に向けた認知機能スクリーニングおよび運動教室による介入を実施し、MCI高齢者に対する運動療法の効果および歩行能力の関係について検討した。

(3) 都内62区市町村における地域づくりによる介護予防の推進に関する調査と発信

都内62区市町村において、地域づくりによる介護予防推進のために、通いの場実態調査、アウトカム指標の検討等を行い、結果について、都内62区市町村へ提供した。

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 植田拓也, 柴喜崇, 渡辺修一郎: 冬期, 早朝の屋外での体操実施における体操前後の循環動態の変動ーラジオ体操を含む軽運動の実施についての検討ー. 第13回日本応用老年学会大会, 2018年10月.

- 2) 植田拓也, 江尻愛美, 安永正史, 河合恒, 藤原佳典, 渡邊裕, 平野浩彦, 伊藤久美子, 白部麻樹, 三木明子, 大淵修一: 地域づくりによる介護予防のアウトカム指標検討のための予備的研究. 第77回日本公衆衛生学会, 2018年10月
- 3) 白部麻樹, 江尻愛美, 伊藤久美子, 安永正史, 三木明子, 植田拓也, 河合恒, 大淵修一: 地域づくりによる介護予防への参加意向における地域特性との関連. 第77回日本公衆衛生学会, 2018年10月
- 4) 安永正史, 江尻愛美, 植田拓也, 河合恒, 伊藤久美子, 白部麻樹, 三木明子, 藤原佳典, 渡邊裕, 平野浩彦, 大淵修一: 住民主体の通いの場に参加する地域高齢者の特徴
- 5) 大森圭貢, 植田拓也, 佐々直紀, 田中繁弥, 田中千香, 山上徹也, 柴喜崇: 地域在住軽度認知機能低下者における等尺性膝伸展筋力測定の見直しと妥当性. 第5回日本予防理学療法学会. 2018年10月
- 6) 鹿内誠也, 植田拓也, 井上誠, 長田美沙季, 畠山浩太郎, 柴喜崇. 運動習慣のある地域在住高齢者における社会的孤立者の割合とその変化に与える要因. 第5回日本予防理学療法学会. 2018年10月
- 7) 三宅理佳, 植田拓也, 畠山浩太郎, 井上誠, 長田美沙季, 柴喜崇. 運動習慣のある地域在住高齢者の手段的 ADL 実施頻度の変化に関連する要因-性差の検討-. 第5回日本予防理学療法学会. 2018年10月
- 8) 安齋紗保理, 植田拓也, 佐々直紀, 柴喜崇. 地域在住高齢者におけるIADL困難感の現状とその関連因子. 第5回日本予防理学療法学会. 2018年10月

【その他の研究活動】

●講演

- 1) 植田拓也. 東京都介護予防推進支援センター事業について. 公益社団法人東京都理学療法士協会 平成30年度第2回リーダーフォローアップ研修, 平成31年2月22日, TKP新宿カンファレンスセンター
- 2) 植田拓也. 東京都が進める介護予防の姿 ~「住民主体の通いの場」について~. リハビリテーション専門職による大田区総合事業研修, 平成31年2月15日, 池上会館
- 3) 植田拓也. 健康寿命を延ばすには? これからの介護予防に必要なのは社会参加の仕組みづくり. CareTEX2019, 平成31年2月6日, 東京ビックサイト
- 4) 植田拓也. 健康で長生きするための秘訣~キーワードは地域でつくる健康長寿~. 公益社団法人東京都理学療法士協会 品川区支部 平成30年度 第2回 一般公開講座, 平成31年1月27日, 品川リハビリテーションパーク
- 5) 植田拓也. 東京都介護予防推進支援センター成果報告(事業評価・効果検証). 第2回介護予防推進会議, 平成30年12月27日, エステック情報ビル
- 6) 植田拓也, 他. 自立について考える. 平成30年度自立支援・介護予防に向けた地域ケア個別会議実践者養成研修. 2018年12月9日

- 7) 植田拓也, 他, 自立について考える. 平成30年度自立支援・介護予防に向けた地域ケア個別会議実践者養成研修. 2018年11月18日
- 8) 植田拓也, 他, 自立について考える. 平成30年度自立支援・介護予防に向けた地域ケア個別会議実践者養成研修. 2018年11月4日
- 9) 植田拓也, 他, 自立について考える. 平成30年度自立支援・介護予防に向けた地域ケア個別会議実践者養成研修. 2018年11月3日

●委員等

- 1) 平成30年度「自立支援・介護予防に向けた地域ケア会議体制構築支援モデル事業」実践会議委員
- 2) 平成30年度「自立支援・介護予防に向けた地域ケア会議実践者養成研修事業」研修カリキュラム検討委員会 委員

1. 研究課題

- (1) 特別養護老人ホームに勤務する機能訓練指導員の取り組みと役割、施設における方法について
- (2) 特別養護老人ホームの介護職員の腰痛対策として、福祉機器である介護リフトの導入と活用状況について

2. 研究活動の概要

(1) 特別養護老人ホームに勤務する機能訓練指導員の取り組みと役割、施設における方法について

雑誌掲載された論文を踏まえ、さらに課題を深めるため、要介護度の重度化が進む特別養護老人ホームの入所者に対して機能訓練指導員がどのような取り組みや考えをもっているか、さらに多職種で進めているかを機能訓練指導員にたいして質的調査を行い分析した。現在、分析結果に基づき投稿原稿を作成中である。

(2) 特別養護老人ホームの介護職員の腰痛対策として、福祉機器である介護リフトの導入と活用状況について

介護労働者の腰痛は、本人の影響のみならず、社会で克服すべき問題となっている。その対策の観点から、福祉用具の導入状況に加え、活用状況を含めた実態とその背景を把握すべく多施設を対象とした介護リフトに対するアンケート調査を実施した。学会発表した内容を深めるために追加調査を行い、論文化を試みているところである。

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 第60回日本老年社会科学学会「特別養護老人ホームにおける介護用リフトの導入・活用状況と普及阻害要因に関する研究」植田大雅, 杉澤秀博

【その他の研究活動】

- 1) 東京都社会福祉協議会東京都高齢者福祉施設協議会
職員研修委員会機能訓練指導員研修委員会代表幹事（8年目継続）として研修会企画・運営

1. 研究課題

地域在宅高齢者のスポーツ実施の年次推移とその要因に関する運動生態学的研究

2. 研究活動の概要

東京都あきる野市「生涯学習に関する市民アンケート」から地域高齢者のスポーツ実施の年次推移を明らかにするとともに、その要因を抽出した。

三重県志摩市が運営する運動推進リーダー育成事業に継続して参画し、地域差のある住民地区活動と新規に参加する住民の特性を評価した。

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 江川賢一. 2018「スポーツ都市あきる野」推進計画の中間評価におけるスポーツ実施率の関連要因. 日本公衆衛生学会総会抄録集65 (10特別附録), P.561
- 2) 江川賢一. 2018「スポーツ都市あきる野」計画におけるスポーツ実施率の年次推移. 第73回日本体力医学会大会 (福井) プログラム・予稿集, p.230

【その他の研究活動】

- 1) 東京都あきる野市スポーツ推進審議会での事業推進・評価を実施
- 2) 志摩市運動推進リーダー継続研修での事業推進・評価を実施
- 3) 早稲田大学総合研究機構スポーツ産業研究所における地域スポーツ振興研究

1. 研究課題

- (1) 高齢者とメディア
- (2) 高齢者とコミュニケーション

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者とメディア

高齢者がメディアの中でどのように描かれているのかを検証する。また、社会的弱者のイメージがクローズアップされがちな高齢者の“自立した姿”を発信するとともに、高齢者向けの生活情報を紹介する。

(2) 高齢者とコミュニケーション

高齢者とコミュニケーションを図る時の音声表現などについて研究し、その成果を発信する。

3. 研究業績

【番組制作および出演】

1) 深夜便（NHKラジオ第一放送）

2016年4月より、レギュラーコーナー「わたし終いの極意」を企画・制作。

人生のゴールを迎えるその日まで健やかに暮らすヒントを、道を究めた専門家に聞く。

- ① 「いのちのふしぎ」生命誌研究者 中村桂子さん
- ② 「人生に賞味期限なし！」料理研究家 小林まさるさん
- ③ 「面白かったといえる人生を」フリープロデューサー・木村正雄さん
- ④ 「最期まで自分らしく」認定NPO法人エンディングセンター理事長 井上治代さん
- ⑤ 「人生最後の社会貢献」立教大学社会デザイン研究所研究員 星野哲さん
- ⑥ 「マリンバがくれた人生」マリンバ奏者 安倍圭子さん
- ⑦ 「幸せな思い出とともに」医師 内藤いづみさん
- ⑧ 「ライフイズワンス！悔いなく生きよう」タレント・茶道家 ルー大柴さん
- ⑨ 「きちんと“生き終える”ために」体操指導者 菊池和子さん

- ⑩「心を磨き、心を育てる」（アンコール）詩人 新川和江さん
- ⑪「妻亡きあとを生きる」（アンコール）日本対がん協会会長 垣添忠生さん
- ⑫「死してなお生きる」映画監督 羽仁進さん
- ⑬「おカネはこの世で使い切る！」経済評論家 萩原博子さん

そのほかのインタビューコーナー企画・制作 高齢者自身の生き方や、それに感銘を受けた若い世代の活動などを紹介。

- ①「サハリンに生きる“ニッポン”を撮る」写真家 後藤悠樹さん
- ②「行動する女性を応援したい」
フィッシュファミリー財団理事 厚子・東光・フィッシュさん
- ③「“おもしろい”を追いかけ続けて」コピーライター 糸井重里さん
- ④「写真と声で発信！私たちの3.11」
NPOフォトボイスプロジェクト共同代表 湯前知子さん
- ⑤「日本一幸せなバーテンダー」現役最高齢93歳のバーテンダー 井山計一さん

2) 視覚障害ナビラジオ（NHKラジオ第二放送）

視覚障害者向け情報番組の企画・制作。

障害と向き合いつつ、はつらつと生きる高齢者を取材したものを抜粋。

- ①「舌と手でひらく道」盲ろうの料理人・林和男さん
- ②「亮太が行く③！百聞は“一触”に如かず～岩手森の探検隊」
- ③「南極船宗谷にタッチ！60年に歴史に触る」
- ④「先輩×後輩ナビラジオ交友録～“絶対色感”」で想いを描く
対談 イラストレーター エムナマエさん×アーティスト・川渕大成さん
- ⑤「無視覚造形作家の挑戦」鍼灸師・造形作家 持田健史さん
- ⑥「走って書いて、晴れやかに生きる」鍼灸師・エッセイスト黒澤絵美さん
- ⑦「亮太が行く！④Shall we dance? 体験！ブラインドダンス」

【執筆】

- 1) デーリー東北「私見創見」月一本の連載の中で、高齢者に関わる問題を提起。

【その他の研究活動】

- 1) 大学の授業の中で、スピーチや高齢者とのコミュニケーションに関する講義を実施。
桜美林大学「口語表現Ⅰ」「口語表現Ⅱ」
東京経済大学「日本語表現Ⅰ」「日本語表現Ⅱ」
フェリス女学院大学「放送文化と制度」
放送大学「スピーチとコミュニケーション」

1. 研究課題

高齢慢性疾患患者における服薬アドヒアランスが疾患管理行動に影響する要因について～社会認知理論を応用して

2. 研究活動の概要

高齢者の多くが慢性疾患により服薬を余儀なくされている。服薬率が疾病の予後を左右するが自覚症状の乏しい慢性疾患において服薬遵守が良くないことが報告されている。患者の服薬遵守度をWHOで定義されている服薬アドヒアランスとしてとらえ、それに影響を与える因子について、先行文献の検討を行っている。

3. 研究業績

【著書】

- 1) 押切康子：ドキドキする。（坂口真由美編，石橋幸滋監修）ここが知りたかった薬局で気づく疾患シグナルー見分け方とつなぎ方. 64-73, 南江堂, 東京 (2018) .

【論文】

- 1) 押切康子, 杉澤秀博：多剤併用の高齢患者の不安に関する質的分析. 日本プライマリ・ケア連合学会誌, 41(3)：85-91 (2018) .

【その他の研究活動】

学会発表

- 1) 押切康子, 柴田淑子, 田中雪葉, 坂口眞弓：地域住民が求める「健康サポート薬局」機能に関する調査研究. 第9回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会, 2018.6
- 2) 川末真理, 押切康子, 坂口眞弓：薬局薬剤師からみた医師との連携の現状. 第51回日本薬剤師会学術大会, 2018.9
- 3) 柴田淑子, 押切康子, 田中雪葉, 坂口眞弓：求められる「健康サポート薬局」として機能するためには？. 第51回日本薬剤師会学術大会, 2018.9
- 4) Mayumi Sakaguchi, Yoshiko Shibata, Yukiha Tanaka, Yasuko Oshikiri：The way of health support pharmacy in the future. 27th Congress Federation of Asian Pharmaceutical Associations, 2018.10

1. 研究課題

- (1) 高齢外来患者の低栄養に関する調査・研究
- (2) 産業保健における高齢者就労支援

2. 研究活動の概要

(1) 高齢外来患者の低栄養に関する調査・研究

高齢期における健康管理に低栄養の予防は必須である。高齢者は、「かかりつけ医」である地域クリニックで、通常の外来通院時に低栄養を指摘されることあるが、数値だけの説明ではわかりにくい。そこで、通院患者の血清アルブミンを中心に、高齢者の健康課題が見える化されることにより、高齢者にとって理解しやすい情報提供のあり方を調査している。

(2) 産業保健における高齢者就労支援

わが国では、2017年に策定された「働き方改革実行計画」の中に「高齢者の就業促進」がある。具体的には、継続雇用延長・定年延長の支援と高齢者のマッチング支援となっている。産業保健の現場において、高齢労働者における健康課題となる疾病の増加、高齢者に生じる機能低下、高齢者の直面する心理社会的問題があり、その実態と支援方法について情報収集する。

3. 研究業績

【研究活動】

- 1) 高齢外来患者の低栄養に関する調査・研究
 - ・データ収集
- 2) 産業保健における高齢者就労支援
 - ・担当部署とシニア層の健康診断項目の内容検討
 - ・企業内外広報誌コラム執筆「食と健康」 フードファディズム

1. 研究課題

- (1) 高齢者の社会文化的表象についての研究
- (2) 「老い」に対するネガティブなイメージ形成の一要因と考えられる「認知症」に関するメディアや小説での捉えられ方について

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者の社会文化的表象についての研究

時代とともに変化、多様化する高齢者のイメージについて、小説における描かれ方を中心に読み解き、分析を行った。

- ①多くの人が抱く伝統的な高齢者のイメージは、隠居者、家族等による扶養者、祖父母、老賢者等である。ここでは主に昔話や民話、近代文学で高齢者がどのように描かれているかを読み解いた。長い歴史のなかで継承されてきた日本の伝統的な高齢者のイメージについて、文献レビューを含め分析を進めている。
- ②戦後から1960年代までの映画や小説には、生と死をテーマにしたものが多くみられる。作品に描かれた生と死がどのように高齢者イメージの形成に結び付いたのか、両者の関連性について考察した。また、日本が急速にサラリーマン化する1960年代は定年退職の問題が顕在化し、それが「老い」の衰退のイメージに強く影響していると考えられる。小説に描かれた死と衰退のイメージと社会への影響について考察した。

(2) 「老い」に対するネガティブなイメージ形成の一要因と考えられる「認知症」に関するメディアや小説での捉えられ方について

メディアや小説で取り上げられた認知症の社会文化的表象について、認知症の医学的概念の変化を時系列的に整理し、認知症に対する社会的病気観との関連性を分析、考察した。小説については、特に医師が書いた作品を中心に、医学的観点からの病気の描写と表現を読み解き考察した。

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 城戸亜希子、長田久雄：メディア、小説に取り上げられた認知症、第19回認知症ケア学会（新潟）、2018年6月17日.
- 2) 城戸亜希子：小説に描かれた認知症：認知症の社会文化的表象をめぐって、第13回日本応用老年学会大会（東京）、2018年10月20日.

1. 研究課題

公衆栄養学授業の論文講読演習において学生が選択した傾向について－高齢者の食生活に注目して－

2. 研究活動の概要

公衆栄養学演習授業において、学生が興味を持った既存論文を1人1編選択し、論文の要約を行う演習を実施した。学生がどのような論文に興味を持ち選択したかを調べることで、今後の管理栄養士の教育の指導手法や論文講読の環境整備の検討を行い効果的な授業の方策を探ることを目的に実施した。

方法：平成30年度の管理栄養士科3年生の合計32名を対象とした。

論文の検索は、図書室やウェブサイトなどで検索・調査し、学生が興味のある論文（基本的に原著又は報文）を選択させた。選択した論文を「研究の背景」「先行研究」「目的と意義」「研究方法」「結果」「考察」とまとめ、論文に対する学生自身の意見や感想を添えて発表した。

結果：学生が選んだ論文の掲載雑誌の31%は「栄養学雑誌」であったが、日本調理科学会誌が28%、日本食品科学工学会誌が16%で、調理学及び食品学の雑誌を選んだ学生が40%を超えていた。選択した論文のうち高齢者に注目した学生は3名（9.4%）であった。

～高齢者の食生活に注目した論文のテーマ～

- 高齢者施設入居者の血清セレン濃度とセレン摂取量：栄養学雑誌Vol.75, No.1, 29～38 (2017)
- 大根を用いたきざみ食の食べやすさの検討－若年者と高齢者の比較－：日本調理科学会誌, Vol.47, No3, 134～142 (2014)
- うどんの力学特性と咀嚼特性に及ぼすタピオカ澱粉混合濃度の影響：日本食品科学工学会誌, Vol.61, No8, 353～361 (2014)

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 久喜美知子：栄養専門学校管理栄養士科,新野直明：桜美林大学大学院老年学研究科,「公衆栄養学授業の論文講読演習において学生が選択した傾向について」, 第65回日本栄養改善学会学術総会, 平成30年9月5日, 朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター (新潟県)

【その他の研究活動】

- 1) 平成30年度 相模原市食育推進委員会（相模原市栄養士会会長として出席）
日程：平成30年11月20日（火）
場所：相模原保健所A館3階 一般検診室
内容：食育フェア打ち合わせ及び第3次相模原市食育推進計画について
- 2) 第9回楽しさアップ！おいしさアップ食育フェア（相模原市主催）
相模原市食育推進計画に基づき実施したイベントに相模原市栄養士会役員として協力
日程：平成31年2月16日（土）
場所：アリオ橋本1階 アクアガーデン
内容：テーマ「塩分減らせば和食は無敵」、塩分濃度の簡易測定、栄養相談
- 3) 健康さがみはら編集会議（相模原市栄養士会会長として出席）
日程：平成31年2月28日（木）
場所：相模原総合医療センターA館5階 会議室
内容：相模原市の健康情報誌「健康さがみはら」の担当紙面と掲載内容について

1. 研究課題

- (1) 「人間関係力向上プログラム」の介入効果に関する研究
- (2) 高齢者の笑いヨガに関する研究
- (3) 母親のマインドフルネスに関する研究
- (4) 高齢者の生涯学習等に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 「人間関係力向上プログラム」の介入効果に関する研究

ワークの内容を検討する為、既存の自由記述から分析を行い、結果をまとめワークショップに活かすため、課題に取り組む。

(2) 高齢者の笑いヨガに関する研究

先行研究で、ストーリーのある笑いヨガは性差の違いがないことが明らかになったことを踏まえ、今回の研究は、高齢者大学に通う受講生にストーリーのある笑いヨガを実践して、気分や感情に与える心理的効果の検証を行った。その結果、「気分」は快適な状態に導かれ、落ち着き穏やかでリラックスした安定的な状態に改善することが明らかになった。自由記述からも「楽しい」「すっきり」「落ち着く」「気持ちが良い」などの感想があった。ストーリーのある笑いヨガでは、エクササイズ間の流れのイメージを膨らませながら、その想像力によって笑いを引き出しやすくなり、楽しめたことが推測される。

また、一方的なセッションではなく参加者の提案を取り入れることで創作する要素もあったと考えられる。このことから、高齢者大学での講座にストーリーのある笑いヨガを用いることで、健康づくりや仲間づくりに貢献できると考えられる。

以上のことを学会で発表を行った。

(3) 母親のマインドフルネスに関する研究

小学生の母親を対象に調査した結果の分析について精査する。また、結果をまとめ成果を学会にて発表予定である。

(4) 高齢者の生涯学習等に関する研究

自由時間研究会でスーパーボールとラクロスボールを使用したヨガ実践について発表を行った。また、高齢者大学でのストーリーのある笑いヨガの実践報告を行った。

このまとめた内容の書籍が来年度出版予定である。

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 高齢者大学における笑いヨガの心理的効果 –流れのあるストーリーを用いて–
2018.6.23 日本健康心理学会第31回大会発表論文集 日本健康心理学会 京都橘大学

【その他の研究活動】

- 1) 千葉県生涯大学「笑ヨガ」「ストレスマネジメント」講義と実践（連続講座）
- 2) 相模原市高齢者福祉課「あじさい大学」卒業生の自主グループ「ボディワークヨガ」を実践
- 3) 特定非営利活動法人 わくわくガイア「健康の予防」講義と実践
- 4) 世田谷区民会「ストレスケア」講義と実践
- 5) 大田区地域活動グループ「ボディワークヨガ」講義と実践（連続講座）
- 6) 地域社会活動自由時間研究会「生涯者大学での実践報告 第一弾」
地域社会活動自由時間研究会「生涯者大学での実践報告 第二弾」
- 7) 日本健康教育学会 日本健康教育士養成機構「第17回健康教育者のためのサマーセミナー・
ストレスコーピングの実践」
- 8) 私立幼稚園にて講演「リラックス子育てでハッピーな毎日」

1. 研究課題

地域在住高齢者における健康関連の逆境に対するレジリエンスの尺度開発と関連要因

2. 研究活動の概要

(1) 高齢期の健康関連の逆境/ストレッサーに対するレジリエンスの概念— Framework Analysis による英語文献の検討 一.

高齢期の健康関連の逆境もしくはストレッサーに対するレジリエンスは、①Staudinger et al. (1993) が生涯発達心理学の立場から、レジリエンスと予備力の関係に着目して示したモデル、②世界保健機関 (World Health Organization, 以下WHOと略す) によるレポート“Ageing and Health”に示された“Healthy Ageing”の公衆衛生モデル、③Whitson et al. (2015) が身体的レジリエンスについて、生物医学分野の文献のシステマティックレビューを通して構築したモデル、において取り上げられている。これら3つのモデルは、アウトカムが機能の回復や維持で、予備力の影響を仮定する点で共通している。しかしStaudinger et al. (1993) とWHO (2015) による文献は実証研究ではない。またWhitson et al. (2015) は、高齢期のレジリエンス研究を対象としたシステマティックレビューにより、実証研究も含めて文献レビューを行なっているが、表現型が身体面である身体的レジリエンスに限定しており、心理・社会面を含めた生活状況が中心ではない。以上を踏まえ本研究では、①レジリエンス概念を理解するための尺度開発論文の要素の整理、②介入事象の特定、を目的とした。分析は応用政策研究において、個々の実践の分析から全体を要約し方略を提示するFramework analysisを参考に行なった。

705の文献から、採用及び除外基準に基づき選択された8つの文献において、次にあげる8つの要素を得た。すなわち重要な観点 (ストレスフル・ライフイベントへの反応のような変化のプロセスや成長を表す側面とポジティブなパーソナリティ特性のようなある時点の能力)、調査協力者 (年齢、性別、身体や認知機能・フレイルの状況、国)、項目の形態 (尋ねているのは特徴/特性か、軌跡か)、因子名/項目名/指標、バックグラウンド (サクセスフル・エイジング、フレイル、ストレス理論、複雑ダイナミカル・システムズ理論、既存レジリエンス尺度等)、開発目的 (回復の診断、課題対処の支援等)、逆境/リスク (ストレスフル・ライフイベント、フレイル等)、アウトカム (生活機能・疾病・障害の維持・回復、最適化、長寿等) だった。以上の結果から、レジリエンスに基づく次の3つの介入方略が示唆された: ①潜在的成長力を備えたレジリエンス、②フレイルの高齢者のような健康が低下した地域高齢者における生活機能の回復・維持、適応を促進するレジリエンス、③元気な高齢者の健康の低下を予防するレジリエンス。

(2) 高齢期の健康関連の逆境に対するレジリエンスの分析枠組みに関する質的検討

困難な状況からの回復力であるレジリエンスは、高齢期の健康維持と社会保障費の削減の両方の点から期待される。しかし、高齢期の健康関連の逆境に対するレジリエンスの分析枠組みの検討に関する研究は未だごくわずかであるため、本研究では質的な方法により検討した。特に、尺度を開発した文献の検討（上記(1)の研究）から見出した実証的なレジリエンスの要素－逆境としてのフレイル、アウトカムとしての生活機能－に着目した。生活機能とフレイルは、高齢期の健康関連の逆境に対するレジリエンスをめぐる既存のモデル（Staudinger et al.1993, WHO2015, Whitson et al.2015）にも含まれる重要な概念である。なお生活機能は国際生活機能分類（WHO2002）を参考に、心身機能・身体構造・活動・参加と捉え、健康状態・生活機能・背景因子（環境因子と個人因子）は相互に影響し合うと仮定した。本研究では、生活との関連、可変性という視点から、活動・参加、および背景因子の環境因子に限定した。

分析には、レジリエンスの構成概念の生成に使用した半構成インタビューによる逐語録データを用いた。①フレイルと関連が深い虚弱化について、調査協力者が自覚した健康の虚弱化の表現を逐語録から抽出した。②生活機能の回復・維持の状況について、レジリエンスの下位概念を構築した引用文を読み、国際生活機能分類の第1レベルの中で該当する項目にチェックを入れた。インタビュー調査は桜美林大学研究倫理委員会において承諾を得、中止による不利益がないことなどの説明・同意の上実施している。

結果は次の通りだった。①虚弱化：調査協力者20人中9人から、17の引用を抽出した（身体面12件・認知面2件・両方3件。内容は身体面では筋力・歩行・体力、認知面では車の運転と片付け）。②生活機能：18の下位概念を構成する164の引用から、合計180のチェックを得た（「活動と参加」9項目中の8項目、「環境因子」5項目中の4項目、最多項目は『学習と知識の応用』38チェック）。以上の結果から、自身の健康の低下を認識し生活機能の維持・回復をはかる際にレジリエンスを活かす、という一つの側面が示唆された。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 小林由美子, 杉澤秀博, 刈谷亮太, 長田久雄：地域在住高齢者における健康関連の逆境に対するレジリエンスの構成概念. 老年社会科学, 40(1): 32-41 (2018).
- 2) 小林由美子, 杉澤秀博, 長田久雄, 刈谷亮太：高齢期の健康関連の逆境 / ストレッサーに対するレジリエンスの概念－Framework Analysis による英語文献の検討－. 老年学雑誌, 9(印刷中).

【学会発表】

- 1) 小林由美子, 杉澤秀博, 刈谷亮太, 長田久雄, 殿原慶三：高齢期の健康関連のレジリエンスの構成概念－文献レビューと質的研究から. 第13回日本応用老年学会口頭発表.

1. 研究課題

高齢期の就業機会拡大に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) ホテル業界における高齢従業員雇用の促進要因

本研究ではホテル業界における高齢従業員雇用の促進要因について混合研究法を用いて検討することを目的とした。量的研究では日本の全ホテル927施設を対象に郵送調査を実施し、雇用の進展を2種類の指標（①旧来の指標である高齢従業員比率、②仕事の種類の広がりや評価する在籍と増員意向の部門数）によって評価した。雇用の促進要因は職場の制度、人事責任者の意識、企業属性の3側面から検討した。質的研究では、高齢従業員の仕事の種類が多いホテルの人事責任者を対象とする面接を実施した。分析の結果、高齢従業員比率と在籍あるいは増員意向のある部門数に関連する要因はそれぞれ異なることが明らかになった。人事責任者には高齢者の能力を活用したい意向があったが、高齢者を配置できる分野は限られていた。この研究の結果は学会発表を経て、論文投稿中である。

(2) ホテルの人事責任者が高齢従業員に求める能力

本研究では、1) で実施した郵送調査の自由回答分析に基づき、ホテルの人事責任者が高齢従業員にどのような能力やスキルを求めているのかを解明することを目的とした。研究の進捗状況としてはテキストマイニングソフトを用いた内容分析を進めており、結果は第61回老年社会科学大会で発表予定である。(1) (2) の研究は、公益財団法人江頭ホスピタリティ事業振興財団平成29年度研究助成金「ホテル・旅館業界における高齢者雇用の促進要因に関する研究」（研究代表者：島影真奈美）の助成を受けて行った。

(3) 中高齢者の起業実現及び起業後の業績に対する社会的ネットワークの影響

欧米では起業家及び起業活動に関する研究が盛んに行われており、その対象は中高齢期以上の起業家にも広がりつつある。一方、日本においては定量的な実態把握調査はいくつかあるものの、実証研究の蓄積は乏しい。そこで本研究では、ネットワーク理論の視点から中高齢者における起業の成否に対する社会的ネットワークの影響、及び起業成功をもたらす社会的ネットワークの構築プロセスを明らかにすることを目的とする。研究の進捗状況としては文献レビューをまとめるべく、国内外の文献を渉猟しているところである。

3. 研究業績

【報告書】

- 1) 「ホテル業界におけるシニア世代の活用」島影真奈美, 杉澤秀博. 2018

【学会発表】

- 1) 島影真奈美, 杉澤秀博. ホテル業界における高齢従業員雇用の促進要因：雇用の質に着目して. 第13回日本応用老年学会. 東京. 2018.

【その他】

- 1) 連載「定年後 難民にならない方法」島影真奈美, 「夕刊フジ」(産経新聞社). 2017年10月～現在
- 2) 連載「別居嫁介護日誌」島影真奈美, 「毎日が発見ネット」(KADOKAWA). 2019年2月～現在

【賞罰】

- 1) 第13回日本応用老年学会・口頭発表優秀賞
島影真奈美, 杉澤秀博. ホテル業界における高齢従業員雇用の促進要因：雇用の質に着目して. 第13回日本応用老年学会. 東京. 2018.

【科研費などの助成金】

- 1) 公益財団法人江頭ホスピタリティ事業振興財団平成29年度研究助成金「ホテル・旅館業界における高齢者雇用の促進要因に関する研究」(研究代表者)

1. 研究課題

- (1) 高齢者の入浴事故防止
- (2) 事故になりにくい入浴方法

2. 研究活動の概要

- (1) 日本温泉地域学会 研究発表大会への参加（かみのやま温泉）
- (2) 入浴事故を起こさないための注意喚起（朝日新聞）

3. 研究業績

【論文】

- 1) 地域在住高齢者の入浴時の生理的・心理的反応－半身浴を用いた入浴方法の検討－

【その他の研究活動】

- 1) 高齢者の安全入浴に関する講演（さいたま市 大宮東公民館）

1. 研究課題

介護家族への支援についての研究

2. 研究活動の概要

- 1) 平成30年度老人保健健康増進等事業「認知症の人の家族等介護者への効果的な支援のあり方に関する研究事業」（認知症介護研究・研修仙台センター）の調査業務補助

近年、家族介護者になにも支援が届かない「空白の期間」があることが注目されている。家族等介護者支援において、どの時期やどの時点に空白の期間があるのか、またどの時期にどのような手段でアプローチをするのがより効果的なのか実態調査を行い、現行の家族等介護者支援の手引きに反映させ、より質の高い手引きを作成することが本事業の目的であり、その調査業務の一つとして認知症と診断された後から必要な資源に繋がるまでの対応事例、支援事例の収集を行った。

- 2) 別居子による別居介護についての実態調査

「遠距離介護」に代表されるように、別居子が通いながら介護を行う、別居介護という介護形態が近年増え続けている。マスメディアにも取りざたされ、社会的な関心も高まり、今後も別居介護を選択する家族が増えるであろうと予測されているが、学術的な研究蓄積がなされていないのが現状である。そこで、別居介護の実態を調査し、介護者および支援者、双方に役立つ支援モデルを導き出すことを本調査の目的とし、現在文献調査を行い準備を進めている。

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 関野明子, 長田久雄: 家族介護者支援に向けた理論モデルの構築 – ストレスコーピングに着目して –. 日本老年社会学会第60回大会, 東京, 2018年6月9日.
- 2) 関野明子, 長田久雄, 森下久美: 夫介護者が語る妻への「殺意」についての事例比較: 老老介護の二つの事例から. 第13回日本応用老年学会大会, 東京, 2018年10月21日.

1. 研究課題

- (1) 認知症当事者の声や語りに基づいた当事者主体の支援の在り方を見出す。認知症当事者が認知症と共に生きていくことへの思いや、そこから見えてきた彼等の現実に立ち向かう姿勢を原点に、暮らしやすい地域をどう創っていくか、認知症当事者から見た地域包括ケアシステムの在り方を探る。
- (2) 100歳人生を豊かに生き抜くための実学として、老年学をいかに地域に浸透させていくか、地域住民と共に地域活動を実践しながら模索する。

2. 研究活動の概要

- (1) 支援する側の立場からではなく、認知症当事者に寄り添う立場から認知症当事者の声を聴くことから、住み慣れた街で自分らしい暮らしを続けていくための支援の在り方を導き出すための研究を進めている。調査対象者を得るためにも各地の家族会や当事者の会、認知症サポートセンターなどとの連携やボランティア活動も欠かせない。これまで北海道、東北、関東、東海、関西までと広範囲に地域を定めて、在宅で生活している若年性認知症当事者にインタビューを重ね、「異変の気づきから認知症とともに生きることを見出すまでの過程」を分析テーマに質的研究をしてきたが、昨年より、自分の住んでいる地元に着目することで、新たに見えてきたものがある。
- (2) 高齢者となってからの地域との繋がり方、健康長寿のための心身との向き合い方、定年退職後の経済問題、終活のアイデア、老いの住まい、看取り・看取られ方、死をどう選択するか等、地域在住の高齢者にとって切実な諸問題を、地域活動の中で連続講座等で展開しながら、老年学の啓発と研究活動を両立させる。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 「当事者の語りに基づく認知症と共に生きることを見出すまでの過程」日本認知症ケア学会誌,17(2): 403-411 (2018)

【その他の活動】

- 1) 地域における「認知症サポーター養成講座」講師
- 2) 人生を書くと60歳からの人生が面白く変化する
「自分を見つめ直す文章講座」5回連続講座講師（NPO法人主催）
- 3) 横浜市A区区民企画運営講座
「なるほどコミュニティカフェ」講座の企画運営に携わり、地域住民を対象に定期的に連続講座を開催する。これからの超高齢社会における地域課題を住民レベルでどう支え合うかがテーマである。
- 4) 高齢者専用賃貸住宅における「みんなの保健室」相談員。
- 5) 地域ケアプラザと連携して地域の認知症高齢者に対する支援活動に従事。地域ケア会議等への参加並びに介護家族の支援にもあたる。

1. 研究課題

介護予防・地域支えあい事業アクティビティ・ケアプログラムに関する研究

2. 研究活動の概要

- (1) 昨年度のフィールドワークを継続して実施中。神奈川県A市にあるBグループホームにてアクティビティ・プログラムの企画と実施に携わる。
- (2) 東京都B市にある総合福祉センターを活動場所として展開されている高齢者の自主運営による英会話グループの講師としてプログラムに参加し、高齢者による自主運営プログラムの実施状況を観察しその展望を探る。

1. 研究課題

女性定年退職者の生活と考え方

2. 研究活動の概要

情報収集

女性定年退職者は総合職世代の引退などでここ数年増えてきており、調査報告、文献など情報もふえている。

(1) 所属関連団体からの情報収集

老年社会科学会、日本応用老年学会、高齢社会をよくする女性の会、シニア社会学会、シニアわーくすRyoma 21

(2) 既存関連調査（官庁、民間）の情報収集

3. 研究業績

【講義】

- 1) 順天堂大学 国際教養学科 教養課程にて
死生学を中心にした老年学の講義を行った（平成30年7月12日）

1. 研究課題

認知症に苦しむ人の増加をいかにして地域における活動で抑えるか、つまり認知症予防活動の在り方、を基本的な研究課題とし、この課題を達成するための理論を地域での実践の中から創造していくことを含めて研究課題としている。このような課題は地域包括支援センターとの協力が不可欠である。

私の居住地の地域包括支援センターが中心となって現在行われている認知症に関する活動には、改善を要する点が2つある。

- ①認知症に関する活動としては「認知症キャラバン・メイト」の養成が中心になっていて、認知症の知識を住民に広めることにはあまり力が注がれていない。
- ②地域包括支援センターが行う活動に参加する人は、主としていろいろな活動に積極的に参加する活動的なタイプの住民であって、認知症のリスクの小さい人たちである。つまり認知症予防のための活動の一番重要なターゲットである認知症のリスクが大きいと考えられる住民が放置されているということである。

2. 研究活動の概要

このような2つの問題について、地域包括支援センターと話し合い、改善を進める検討を行った。

まず①については、「認知症キャラバン・メイト」の養成と、地域住民へ認知症の知識を広めることは別の活動であることを地域包括支援センターに認識してもらうことに力を注いだ。地域包括支援センターの人材不足もあって、年に4回行う「認知症キャラバン・メイト」の養成講座をもって地域住民へ認知症の知識を広める活動と考えがちになる。それは間違いであることを説得し、この養成講座とは別に認知症予防講座を設けることに合意を得た。

②については、私は「上澄み理論」なるものを提唱した。地域の住民を認知症になるリスクの大きさに評価すると、低リスクの地裁住民、つまり「上澄み」と、その下に大量に堆積していると考えられる高リスクの人々、いわゆる「よどみ」とが考えられる。

これまでの認知症対策は、地域包括支援センターが行う活動に参加してくる人を対象に行われてきた。そのような人たちは、ここで言う「上澄み」であり、認知症のリスクの小さい人々である。

どのような人々がこのような活動に参加しているかという、年齢では90パーセントが65歳以上の高齢者である。この参加した高齢者は、その地域に居住している高齢者の約3パーセント程度に過ぎないと推定される。そしてこれらの参加者は多くが普段から積極的に活動している人たちである。地域

包括支援センターが行う活動以外に、地域で行われている体操やウォーキングなどの運動のグループ、コーラスや編み物、俳句などの趣味のグループなど、に参加している。

地域に居住している人々の中で、最も認知症になるリスクの大きい人々は、底深くに沈積していて、いろいろな活動に参加していないのである。

このようなことが調査の結果明らかとなった。

それではどのようにして「よどみ」層に認知症予防の活動を及ぼしていくか、を議論した。私の提唱する方法は、町内会に働きかけ、各町内会単位に認知症予防の講演会、後記する長谷川式認知機能テストの集団実施、簡単な身体の状態の測定、を行うことである。この実施について、検討を続けた。

私が開発した長谷川式認知機能テストの集団実施とは、講演などに集まった多数の人を対象に長谷川式認知機能テストを実施する方法であって、採点は本人が行い、従って得点を他人に知られることがない方法である。

また認知症の知識を地域に普及させる活動の効果をどのように測定すべきかも共同の研究課題として合意された。

「認知症予防」と銘打った活動には参加を敬遠するという空気が地域にはまだある。そうした活動に参加すると、他人から「あの人認知症じゃないか」と疑われるという心配である。現在でも、そのような住民の懸念がある。その中で活動を進めていく難しさもある。

3. 研究業績

【講演】

- 1) 2018年4月から6月、横浜市港南区上大岡第4町内会集会所において「認知症は予防できる」と題する講演を3回実施。参加者49名
- 2) 2019年2月、横浜市港南区港南中央地域ケアプラザにおいて「認知症は予防できる」と題する講演を行った。参加者55名
- 3) 2018年10月、川崎市役所主催傾聴ボランティア養成講座の講師として、認知症予防の講演を行った。参加者25名

1. 研究課題

- (1) 独居高齢者の配偶関係からみた類型が高次生活機能および精神的健康状態に及ぼす影響
- (2) 認知症高齢者のQOLと環境との関連

2. 研究活動の概要

(1) 独居高齢者の配偶関係からみた類型が高次生活機能および精神的健康状態に及ぼす影響

首都圏での増加が著しい独居高齢者は、その配偶関係からみた類型が多様化している。配偶者との関係から、別居・離別・死別・未婚に類型化した。類型が健康状態に及ぼす影響を明らかにすることを目的とし、老研式活動能力指標およびWHO-5-Jを用い検討した。

(2) 認知症高齢者のQOLと環境との関連

首都圏のユニット型特別養護老人ホーム（ユニット型特養）に入所している認知症高齢者のQOLと環境との関連について検討した。

3. 研究業績

【論文】

1) 博士論文

「独居高齢者の配偶関係からみた類型が高次生活機能および精神的健康状態に及ぼす影響」
(平成30年9月3日 博甲第85号 取得)

【学会発表】

- 1) Environmental Design and Quality of Life of Older Adults Sumiyo Brennan MA, Hisao Osada Ph.D., Yumiko Hashimoto Ph.D., & Therese Doan, RN, Ph.D. Aging & Society : Eighth Interdisciplinary Conference (2018-9-18,19 poster)
- 2) ユニット型特養における施設環境と認知症高齢者の生活の質との関連
ブラン野口純代, 渡辺修一郎, 橋本由美子, 長田久雄 (第13回日本応用老年学会大会 2018-10-20, 21 抄録集 69)

1. 研究課題

- (1) 長寿企業の後継者から観た事業承継のプロセス－高齢経営者からの事業承継の質的分析－
- (2) 生きがいをデザインする人生設計
- (3) 少子超高齢化社会を生き抜くための働き方

2. 研究活動の概要

- (1) ・宇治市中途失聴・難聴者協会での講演
「生きがいを支える4つの健康」
- (2) ・ソニー生命保険 有志向け研修
「L I F E (人生・生活・健康) デザイン講座」
- (3) ・ソニー生命保険 有志向け研修
「老年学入門講座」

3. 研究業績

【論文】

- 1) 老年学雑誌に寄稿
「長寿企業の後継者の視点による先代経営者の経営姿勢・生き方の承継プロセス」

1. 研究課題

- (1) 高齢者のQOLと社会貢献の向上に資する公共政策
- (2) 活力ある高齢社会構築に資する公共政策
- (3) 大衆長寿社会における老年学の普及、啓発

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者のQOLと社会貢献向上に関する公共政策

産学公民連携によるフィジビリティ・スタディの推進

(2) 活力ある高齢社会構築に資する公共政策

QOA座標軸検討 (Quality of Aging/健康長寿座標二次元モデル)

「地域公益活動団体 (自治会、NPOなど)」、地方自治体との新・連携の推進

(3) 大衆長寿社会における老年学の普及、啓発

キャンパス・コミュニティ/CCRC構想の研究

高・大連携によるエイジング論共通科目化の研究

集合住宅「二つの古い問題」対策の研究

3. 研究業績

【公共政策プロジェクト】

- 1) 認知症カフェ運営/プログラム・オフィサー (館山市)
- 2) 新たな介護文化創造PT/プログラム・オフィサー (高齢者福祉事業者団体)
- 3) 集合住宅「二つの古い問題」対策プログラム (マンション管理士団体)

【主な講演、講義】

- 1) 老年学特論 (札幌学院大学大学院地域社会マネジメント研究科)
- 2) 高齢者福祉施設職員研修/公共哲学としての死生観

1. 研究課題

後期高齢者における椅子立ち上がりテストと生活動作との関係

2. 研究活動の概要

修士論文では、後期高齢者の10秒椅子立ち上がりテストと大腿四頭筋筋力との関係について、椅子立ち上がりテストの計測値と筋力との関連を検討してきたが、生活動作との結びつきについて検討していく必要性を感じており、椅子からの立ち上がりテストを用い、後期高齢者を対象とした調査を継続して行く。

3. 研究業績

【その他の研究活動】

- 1) 千葉県理学療法士会学術局主催研修会運営
- 2) 千葉県理学療法士会地域包括ケアシステム推進リーダー研修会運営協力
- 3) 印旛地域リハビリテーション広域支援センター事業への協力
- 4) 「専門リハビリテーション研究会誌」編集協力
- 5) 「理学療法の科学と研究」編集協力
- 6) 老人保健施設 おおくすの郷 要介護者への理学療法
- 7) 植松光俊、江西一成、中江誠編集、神経筋障害理学療法学テキスト中枢神経障害理学療法学テキスト改訂第3版（分担執筆）南光堂、229-231、394-400、2018年12月

1. 研究課題

- (1) シニアマーケット研究
- (2) 高齢者の安全・安心に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) シニアマーケット研究

- ・シニアマーケット関連の調査、設計、実施、報告
- ・高齢者をメインターゲットとする商品・サービスに関する市場調査、及び企画一式（調査設計・実査・分析・報告等）
- ・高齢者の行動調査の設計、実施、分析、等
- ・某リサーチ会社による、シニアマーケットに関する研究プロジェクトに参画。過去数十年に渡るデータを基に、高齢者の消費行動を分析・考察
- ・港南区におけるリビングラボ実証研究（産官学民）

(2) 高齢者の安全・安心に関する研究

- ・警察政策学会・日本市民安全学会での研究会に参画
- ・隔月で行われる研究会に参加
- ・日本市民安全学会 毎月行われる研究会に参加
- ・市町村・企業・学会等、依頼講演による啓蒙活動等

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 對馬友美子, 堀内裕子, 亀田憲,
「定年男性の力を地域社会に呼び戻すために：「リビングラボ」を活用した事例」
第13日本応用老年学会大会, 東京, 2018年10月20-21日「優秀賞」受賞

【その他の研究活動】

- 1) 健康寿命延伸支援ビジネス普及啓発事業検討会委員
- 2) 東京大学共創センター「リビングラボ研究会」
- 3) 平成30年度 老人保健健康増進等事業
「官民共同による地域の実情に応じた特徴的な通いの場等の立ち上げに関する調査研究事業」第1回 調査研究事業検討委員会
- 4) 講演他
 - ①2018年4月9日：日本小売業協会（協会内会議室：大手町）
「シニア5000万人時代を考える」新市場の創造 I シニア市場の動向と商品開発・見せ方のポイント」
 - ②2018年4月10日：警察政策学会（日本倶楽部：大手町）
「介護業界の最新事例、AI, Iot, Ict活用最前線」
 - ③2018年5月18日：NHK総合 首都圏情報ネタドリ（渋谷NHKスタジオ）
「巣鴨の高齢者はどこへ！？ ～急増“新型アクティブシニア”～」
 - ④2018年6月8日：株式会社サッポロ（株式会社サッポロ本社：恵比寿）
「老年学（ジェロントロジー）の観点からみたシニア市場攻略のポイント&実践事例」
 - ⑤2018年6月12日：大和ハウスライフサポート株式会社（横浜ベイシェラトン）
「知っておきたい！高齢期の住まい方・暮らし方」～老年学（ジェロントロジー）の視点から～
 - ⑥2018年6月15日：立教セカンドステージ大学（立教大学：池袋キャンパス）
「老年学視点からのシニアマーケット分析」
 - ⑦2018年7月15日：瀬谷区谷戸自治会（横浜市瀬谷区自治会館）
「老年学（ジェロントロジー）から加齢を知ろう」
 - ⑧2018年9月20日：警察政策学会（半蔵門グランドアークホテル）
「フォーラム「AI時代と市民安全：その光と影」
 - ⑨2018年9月26日：某文具メーカー
「老年学から加齢を知ろう」（高齢者用人形の必要性について考察）
 - ⑩2018年10月19日：NHK総合 首都圏情報ネタドリ（渋谷NHKスタジオ）
「多様化するシニア像」
 - ⑪2018年10月24日：品川シルバー大学（品川区立五反田文化センター）
「正常老化を理解する」
 - ⑫2018年10月24日：藤沢歯科医師会 水曜会（湘南クリスタルホテル）
「シニアビジネスに切り込むための老年学（ジェロントロジー）講座」
 - ⑬2018年10月25日：Care TEX関西2018（インテックス大阪）
「シニアビジネスに切り込むための老年学（ジェロントロジー）講座」

- ⑭2018年10月31日：品川シルバー大学（品川区立五反田文化センター）
「高齢期の住まい方」～住まいと安全～
- ⑮2018年11月21日：品川シルバー大学（品川区立五反田文化センター）
「終活について」死生観とデスカフェ
- ⑯2018年11月28日：品川シルバー大学（品川区立五反田文化センター）
「超高齢社会対応サービスを知ろう」
- ⑰2018年12月11日：関東東芝ITユーザー会（東芝川崎）
「これからを考える！シニアライフデザイン」
- ⑱2018年12月14日：東京商工会議所 板橋支部
「健康長寿社会に必要とされるビジネスポイントとはⅠ」
- ⑲2019年1月19日：所沢市役所危機管理課防犯対策室 防犯指導養成講座
「正常老化と振り込め詐欺」
- ⑳2019年2月26日：東京商工会議所 板橋支部
「健康長寿社会に必要とされるビジネスポイントとはⅡ」アライアンスビジネス
- ㉑2019年3月2日：シニアライフコーディネーター養成講座
「ジェロントロジーを理解しよう」

5) 執筆他

- ①堀内裕子, (連載) 発見「いいもの・いいこと」見つけてきました
TECHNOプラス 福祉介護 日本工業出版社
No.100 4月 「健康見守り型クラウドサービス機器（ライフリズムナビ）」
No.101 5月 連載100回記念特集「シニア5000万人時代・新市場の創造」
No.102 6月 「リビングラボⅠ」
No.103 7月 「デス・カフェⅡ」
No.104 8月 「食料品買い物アクセス困難者」
No.105 9月 長寿国「日本」－延び続ける日本の平均寿命－
No.106 10月 「認知症VR体験 －株式会社シルバーウッド－
No.107 11月 －100寿者「センチナリアン」－Ⅰ
No.108 12月 －100寿者「センチナリアン」－Ⅱ
No.109 1月 介護ロボット運用の専門資格 スマート介護士Ⅰ
No.110 2月 介護ロボット運用の専門資格 スマート介護士Ⅱ
No.111 3月 介護ロボット運用の専門資格 スマート介護士Ⅲ
- ②@D I M E, 敬老の日特集「シニアい詳しい専門家に聞く、敬老の日に上げると喜ばれるもの」, 2018年9月15日, 株式会社小学館「DIME」
- ③月刊シルバー人材センター, P22～25, 「新型アクティブシニアの現状分析」, 2019年1月号, 労務行政

- ④ダイヤモンド・セレクト（週刊ダイヤモンド別冊）幸せな定年後「おじさん達へのエール」，2019年3月号，P88，株式会社ダイヤモンド社
- ⑤月刊研究開発リーダー，高齢者・シニア市場の現状と商品開発のヒント，「シニアビジネスに切り込むための老年学（ジェロントロジー）講座」，2019年3月号，株式会社技術情報協会

6) その他

- ①東洋大学 ライフデザイン学部 健康スポーツ学科
自己点検・評価活動結果の外部評価（東洋大学）
- ②株式会社ツクイ「ツクイの考える地域包括ケア」
事例発表全国大会審査員（有楽町読売ホール）

1. 研究課題

ひとり暮らし要介護高齢者に対する住民による支援を検討する。

2. 研究活動の概要

ひとり暮らしの要介護高齢者にとって、遠方に住む家族や高齢になった親類に援助を頼むことが難しい場合、ニーズへの対応の手段として介護保険サービスの利用が中心的なものとなる。しかし、ひとり暮らし高齢者の場合、サービスの利用に至るまでのプロセス或いはサービスの利用後においても、同居家族などでカバーされているニーズへの対応を補うための支援が必要である。住民がこのような支援の担い手として期待されているものの、住民による支援が現実にはどのような役割を果たしているのか、役割達成までのプロセスは何か明確になっていない。本研究では、ひとり暮らし要介護高齢者に対する住民による支援の内容と支援に至るまでのプロセスを明らかにするため、ひとり暮らしの要介護高齢者に対して、専門職の方と連携しながら支援を行っている住民を対象にインタビューを行った。分析の結果、住民が支援を行うには高齢者とその家族、そして高齢者に関わる専門職から理解を得ることが必要なこと、さらに、高齢者との間ではほど良い距離感を保ちながら支援を行うことに注意していることが明らかとなった。今後は、「理解を得る」「ほど良い距離感」の内容についてより深く掘り下げた研究が必要と思われる。

以上の結果は、研究論文「ひとり暮らし要介護高齢者に対する住民による支援－住民の視点から見た役割と課題－」と題して、学術誌に投稿を準備中である。

3. 研究業績

特にありません。

1. 研究課題

認知症高齢者の終末期医療・ケアを代理意思決定する家族への看護支援

2. 研究活動の概要

進行した認知症高齢者の終末期医療・ケアの決定は家族が行わざるを得ないことが多く、多くの認知症高齢者を抱える日本において家族に対する代理意思決定支援は重要な課題となっている。介護老人福祉施設は、このような認知症高齢者の終末期の受け皿としての比重が今後一層増すことが予想されており、代理意思決定支援の改善に活用できる研究が求められている。

平成30年度は、介護老人福祉施設を研究対象とした以下の3課題について、分析および論文執筆を進めた。

1) 認知症高齢者の終末期対応に関する代理意思決定プロセスにおける家族と看護師の相互作用の様相

本研究は、家族が代理意思決定し施設内看取りするまでの過程、およびその過程における看護師との相互作用を解明することを目的とした。分析データは、認知症高齢者の終末期対応に関する代理意思決定の経験をもつ家族と看護師の双方の同意が得られたペア16組を対象に実施した面接調査から得た。分析の結果、①施設内看取りを決断した家族の精神的負担の軽減や代理意思決定の満足度を高める要因は、実際に代理意思決定した時期だけでなく、代理意思決定の前後の時期にも存在すること、②その各時期の関連要因に、看護師が直接的・間接的に関わりをもっていたことが明らかになった。研究結果は、学術誌に投稿中である。

2) 認知症高齢者の終末期対応を代理意思決定した遺族の満足感と後悔に関連する要因

本研究の目的は、認知症高齢者の終末期対応を代理意思決定した遺族の「満足感」と「後悔」の関連要因を、特に看護支援との関連において解明することであった。調査に同意が得られた遺族120名に対する質問紙調査のデータを分析したところ、①代理意思決定への「満足感」と「後悔」には強い相関関係は認められず、関連要因が異なる可能性があること、②看護支援の実施状況に対する認識が代理意思決定への「満足感」と「後悔」に対して直接的または間接的に影響を及ぼすことが示された。現在、投稿準備中である。

3) 専門職の代理意思決定支援と家族の施設内看取り選択との関連

本研究では、入所高齢者の人生の最終段階の医療や看取り場所に関する代理意思決定支援に着目し、専門職の支援と家族の施設内看取り選択との関連を明らかにすることを目的とした。分析データは、施設長を対象とした質問紙調査と、厚生労働省「介護サービス情報公表システム」から得た。分析の結果、家族の施設内看取り選択に有意に関連した要因は、「専門職が高齢者にとっての最善を代理決定者と一緒に考える」、「施設内で実施可能な医療行為」「看取り介護の内容」それぞれに関する看護師からの直接説明であることが示された。この研究の結果は、学術誌に投稿中である。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 牧野公美子, 杉澤秀博, 他 (2018) : 日本における高齢者の終末期医療に関する家族による代理決定についての文献レビュー, 老年看護学, 23(1) : 65-74.
- 2) 内藤智義, 倉田貞美, 牧野公美子, 他 (2018) : 直腸性便秘に対する看護実践の介護保険施設間の比較, 日本健康開発雑誌, 40, 掲載確定.

1. 研究課題

- (1) 高齢者のセクシュアリティ
- (2) 外国人介護労働者の受入

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者のセクシュアリティ

高齢者の適度な性的な満足は、心身の健康や生きがいの源泉にもつながると指摘されている。他方、高齢者の性に対しては、一般の人たちの偏見が強く、そのことが高齢者の性的な満足障がいにつながりかねない。本研究の目的は、一般成人の高齢者の性に関する知識に影響する要因の分析である。

(2) 外国人介護労働者の受入

将来必要となる介護人材の不足を、外国からの人材に頼らざるを得ない現状の中で、如何に、受け入れ側の施設、そのスタッフ及びその利用者たる高齢者に満足のいく受け入れができるかが重要である。そのためにはまず、外国人介護労働者が日本の若者とどこが違うかを理解しなければならない。それは又、外国人介護労働者の日本での労働環境の改善にも通ずる。本研究の目的は、将来日本で介護労働者として働くことに興味のある学生、社会人を対象に「介護留学」についてのアンケート調査、分析を行い、その結果を基に、雇用者の理解を深めることにある。

3. 研究業績

【著書】

- 1) 「大学院で老年学」一粒社、2019年9月

【その他の研究活動】

- 1) 2019年4月、桜美林大学老年学研究科同窓会にてポスター発表
「介護留学プログラムの実践 in Cambodia」
- 2) カンボジアに於いて日本語学校を運営し、大学、高校において「介護留学」プログラムの説明会を行っている。

1. 研究課題

在宅中高年介護者の体力や身体機能能力と介護負担感との関連について

2. 研究活動の概要

博士前期課程での研究の継続となるが、在宅介護をされている中高年者の体力と介護負担感との関係性について調査中である。

また、医療関係者が思うイメージと、介護者の実際感じていることにずれがあることから調査内容の見直し、サービス提供のあり方を見直す糸口を模索している。

3. 研究業績

【その他の活動】

- 1) 千葉県理学療法士会学術局主催 新人教育プログラム研修会講師
- 2) 千葉県富里市 介護保険審査会委員
- 3) 救護施設 猿田の丘なでしこ 入所者の加齢に対する身体機能訓練相談、職員向け研修会講師
- 4) 千葉県理学療法士会主催 印西市印西中学校 歩行年齢測定会
- 5) 千葉県富里市障害者家族会さつき会会員と専門学生との交流授業実施、会員の家族の相談

1. 研究課題

地域包括支援センターの総合相談に関する業務の実施に関連する要因
—社会福祉士に対する調査から—

2. 研究活動の概要

「地域包括支援センターの総合相談に関する業務の実施に関連する要因—社会福祉士に対する調査から—」と題した論文を執筆し、「老年学雑誌」に投稿した。

本研究の目的は、地域包括支援センター（以下地域包括）の総合相談に関する業務の実施に関連する要因を解明することである。分析対象者は地域包括の総合相談に関する業務を担当する社会福祉士177名であった。まず、総合相談に関する業務の実地状況を把握する指標を作成した。「クライアントを中心とした支援とネットワーク構築」（以下ネットワーク構築）と「クライアントの立場に立ったニーズ把握と解決」（以下ニーズ把握）が作成した指標である。次いで、これらを従属変数に「地域における地域包括の位置づけ」、「地域包括内での多職種協働の意識」、「仕事のやりがい」、「地域包括での就業期間」を独立変数として投入し、重回帰分析を行った。分析の結果、「ネットワーク構築」には「介入の対象が個人のみではなく組織も含め広がりを持つ認識」が有意に影響していた。「ニーズ把握」に対しては「個別支援と地域支援の両方を考える」、「地域包括内での多職種協働の意識」、「仕事のやりがい」、「地域包括内での就業期間」が有意に影響していた。以上の結果に基づき以下2点が示唆された。第1に、総合相談に関連する業務はその内容によって関連要因が異なること、第2に、「ネットワーク構築」に対する有意な効果をもつ要因が少なかったのは、本研究で設定した要因が社会福祉士側の立場に立った要因に限定されたことが影響していること。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 吉田綾子, 杉澤秀博 (2019) : 地域包括支援センターの総合相談に関する業務の実施に関連する要因 —社会福祉士に対する調査から—, 老年学雑誌掲載確定。

平成30年度研究活動報告

発行：桜美林大学 老年学総合研究所
〒194-0294
東京都町田市常盤町3758
TEL. 042-797-2661(代)

発行日：平成31年3月31日

印刷：(有)片野印刷